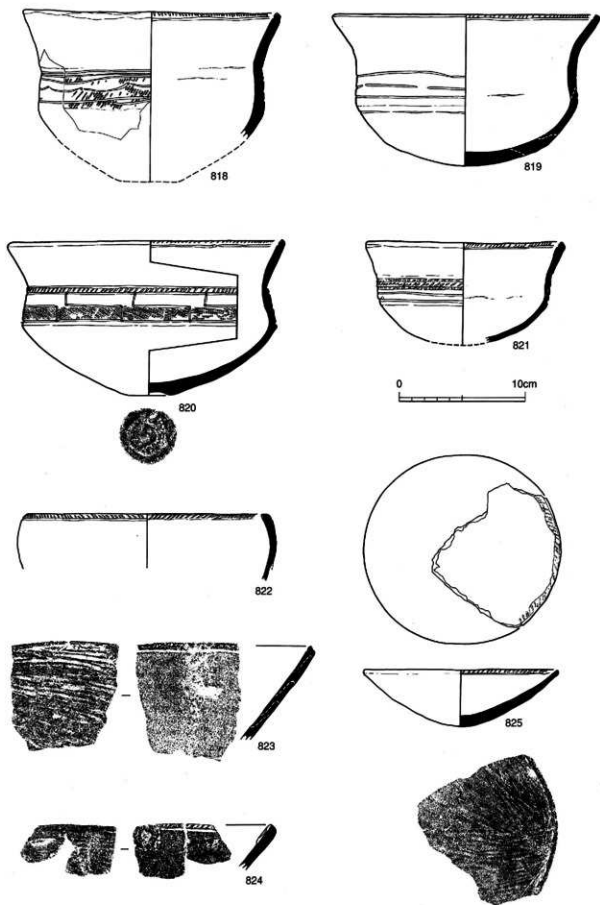
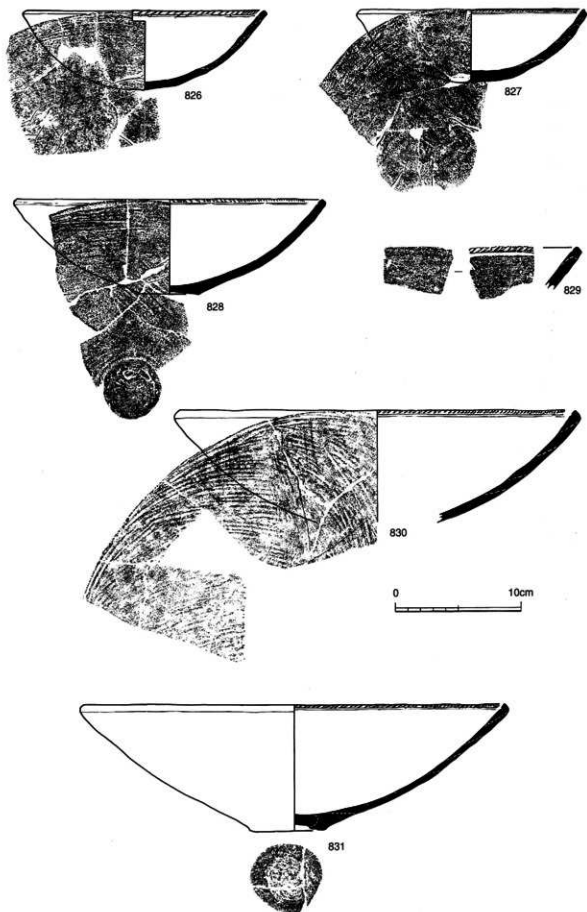


第138図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-18

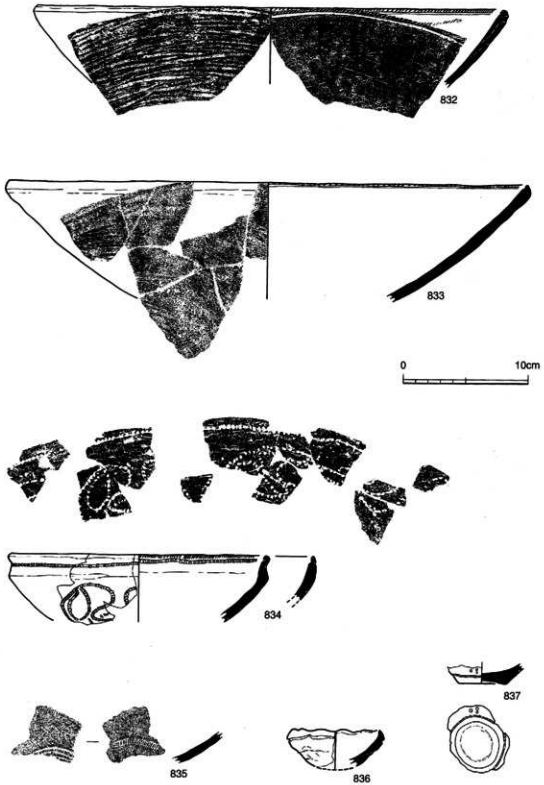


第139図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-19

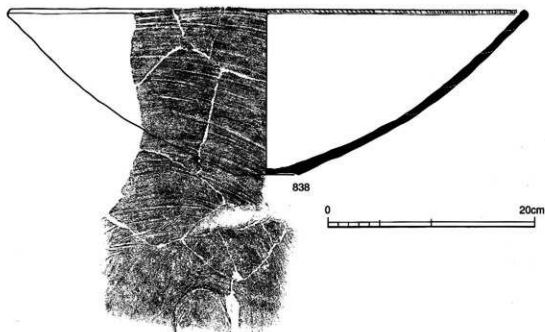
第3節 土器・土偶



第140図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-20



第141図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-21



第142図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-22

た補修孔も多くみられる。

広口鉢 (818~821) : 広口深鉢と同様の形制、文様構成をとるが、器高が口縁半径と前後するもの。したがって、胴部文様にも共通する部分が多く、弧線文系、クランク状文系、平行沈線文系がみられる。818は縄文の撚り方向が異なるだけで、広口深鉢688に対応する。820のクランク状文は10単位で一周するものか。巻貝回転縦縄文を充填している。819、821は平行沈線文系。特に後者の最上帯は平行する刺突沈線間の斜刻帯となり、平口縁浅鉢や注口付土器に通じる構成である。

広口浅鉢 (822~838) ; 822は内鑿して立ち上がる口縁の内外面に斜刻帯を配すもので全体としては鉢形を呈すか。その他は口縁内面に斜刻帯をもつみの浅い皿形浅鉢で、口径約50cmを計る838から、径約15cmほどのものまでである。復元口径24.4cmの828、33.5cmの831は底部を作り出すのに対し、同様の口径31.8cm、30.2cmとそれぞれ推算される830や431の底部はまるく取致する。しかしながら、それ以上のサイズになる同器種は復元されるものでは別途作出された底部を有しており、それ以下のものでは丸い。したがって、口径20~30cmを境に概ね底部の有無は分かれるものと思われる。外面の調整については巻貝条痕を顕著に残すものからその後丁寧になでるものまでみられるが、内面は一樣に丁寧なナダが施されている。823と825はその内面に赤色顔料の付着が認められるもので、前者は口径42.2cmに復元される大型品、後者は外面の条痕調整が二点に取致して弧を描くようて舟形を呈するか。824は内面に注口付土器によくみる瘤状突起を配している。

834以下は、厳密にはこの器種に含めることができない。834は口縁内面斜刻帯こそもつものの、口縁部自体は若干内削した上で外反し、その外面に刺突沈線を配す。胴部外面には全体の文様意匠は解せないものの、曲線文が刺突沈線で描かれる。なお、内面には赤色顔料の付着がみられる。837は同様の手法を用いて胴部に施文をみる底部。器種は判然としない。835は浅鉢形土器であろうと思われるが、内外面とも平行沈線間の斜刻帯を弧状に配しており、かつ、それらの弧の求心点に一致をみない。赤色顔料らしきものの付着が認められる。836は手づくねの小型土器。内折気味の口縁部直下に1本の沈線

を配している。

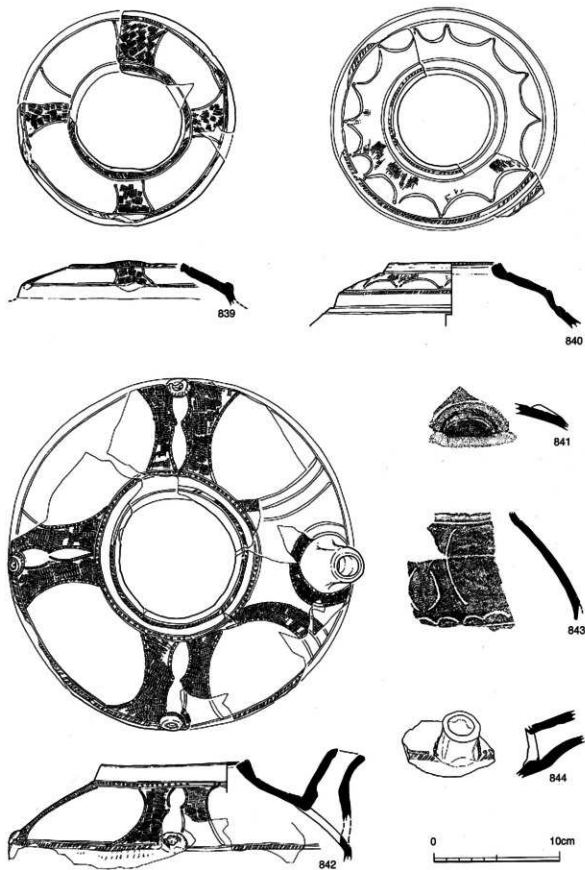
沈線文注口付土器(839-855)；注口付土器もまた、深鉢、浅鉢形土器同様に口縁部形態によって二分できる。すなわち内屈口縁のⅠ類と広口口縁のⅡ類であるが、本器形の場合は口縁部が胴部に直結するものが多く認められるため、その両者の関係をも包摂した体部形態による分類が要請される。本報告ではこれを三分し、アルファベット記号を用いて表すこととする。

注口A類(854・855) 算盤玉状に張る胴部から口頸部が立ち上がる。854は腹部の最大直径部で上下が画されず、渦巻状を呈する胴部文様が下半にまでわたって描かれるもの。平行沈線間刺突列の巡る注口部分も文様として数えると6単位となる。巻貝回転擬縄文充填。胴部最上帯は二枚貝押捺擬縄文の充填で、上下は平行沈線で画されるが、所々寸断され、2個一対の末端刺突を並列させている。内屈する口縁部には4ヶ所に突起および「ノ」字状凸帯を配し、それを結ぶ平行沈線の上下には刻みを施す。855は口縁部に有刻「ノ」字状凸帯、胴部に窪みのある有刻瘤状突起を配す。また、凸帯両側、突起上半周には刺突沈線が巡る。胴部上下は斜刻帯。その間には末端刺突沈線を用いて突起、注口部を圍繞するように平行沈線文が配されている。

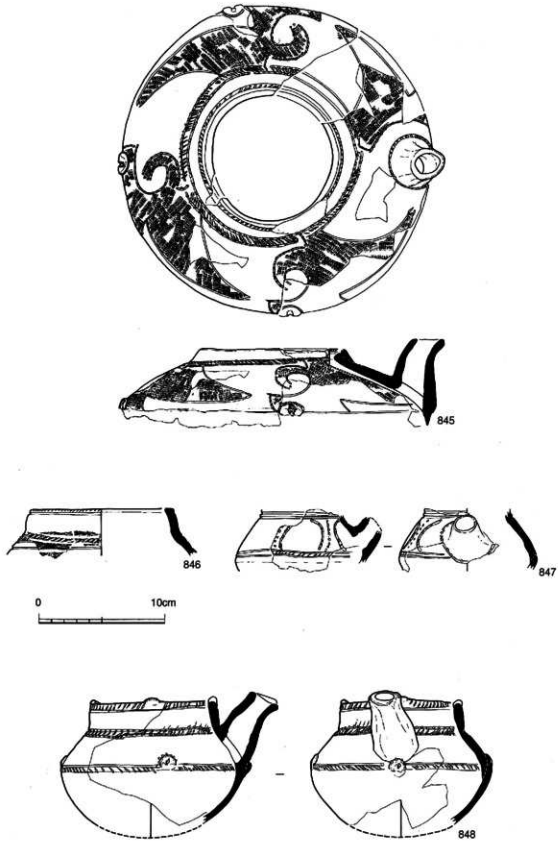
注口B類(839-841) 偏平な形態からUFO形と俗称される土器で、口縁部から腹部屈曲部にいたるまでに無文の階段を設けることによって上下を分割する。この部分を「胴部」、それ以上を内屈口縁と見立て「口縁部」、以下を「胴部」と呼称する。839は上下を二枚貝押捺擬縄文帯とした口縁部。その間には口唇部にある小突起にあわせ4ヶ所に「ハ」字状文を両端刺突沈線で描き、その中もまた擬縄文充填する。口縁部下端の屈曲上に瘤状突起が付されるが、その位置は突起および単位文と整合しない。840の口縁部は有段で、上半帯を断面三角形に肥厚させたもの。内向する口唇部には斜刻帯が設けられる。下半帯には刺突を基点として連続する下弦連弧文が配され、その上位を巻貝回転擬縄文が充める。口縁部最下帯は斜刻帯、胴部最上帯は二枚貝押捺擬縄文である。841は胴部直上、口縁部下半帯にのる馬蹄形状の有刻凸帯である。両側沈線に従える。この類の凸帯は839にみる瘤状突起同様、本遺跡においては少数である。なお、注口B類は専ら大型品に限られる傾向があるが、取り付く注口部はそれに比例して大きいものとはいえないようである。

注口C類(842-850) 算盤玉状を呈する胴部に直接口縁部が取り付く。すなわち、腹部屈曲部を境として上半は口胴部、下半は胴部および底部となる。口縁部および胴部上半が一連となる場合、腹部の屈曲は内屈口縁のそれに見立てることが可能で、口縁部形態のⅠ類に包摂して考えることもできる。また、この口胴部上端が内傾して立ち上がるものもある。

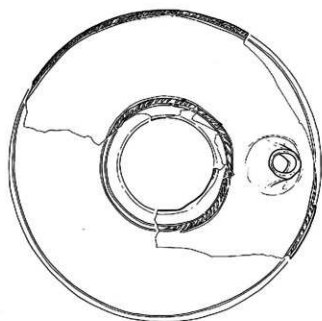
842、845の口縁部は断面三角形に肥厚し、内向する口唇部に斜刻帯を配す。前者においては胴部最上帯は刺突列、最下帯を斜刻帯とし、刺突を圧した3ヶ所の瘤状突起ならびに注口部を単位として、「ハ」字状、「8」字状の刺突沈線文を組み合わせた「H」字状擬縄文帯を配す。擬縄文は巻貝を回転施したものである。この意匠は843に通じる。こちらは擬縄文部分と磨消部分が一部反転したものであるが、下位には下弦連弧文が配されている。847も中心こそ縦位刺突沈線のみであるが、全体の意匠は類似しよう。後者の845は注口A類にあたる580同様の文様構成、文様意匠をもつ。ただし、本例は巻貝回転施文による擬縄文、粒が連結しキャタピラ状の外観を呈するものである。なお、胴部は屈曲部で欠損しているが、擬口縁部の刺突が明瞭に観察される。846、848および850は口縁部が内傾して立ち上がり、その外面上端に斜刻帯が配される。849は850同様の形制をとりながらも口縁部に施文をみない個体。850は刺突沈線で描き巻貝回転擬縄文充填した文様を胴部に配するようであるが、欠損のため不明。一方、849は上



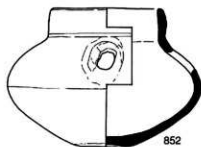
第143図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-23



第144図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-24



851



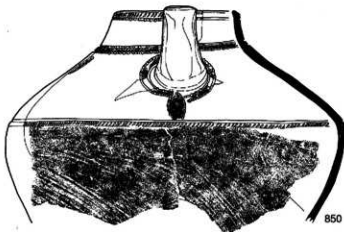
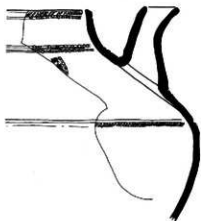
852



849

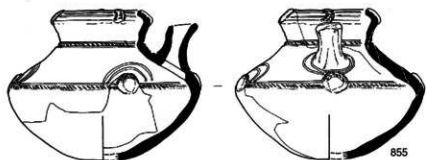
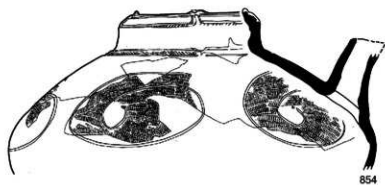
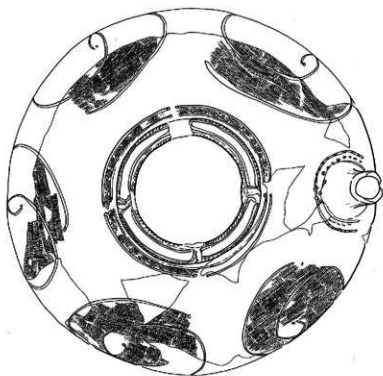


853

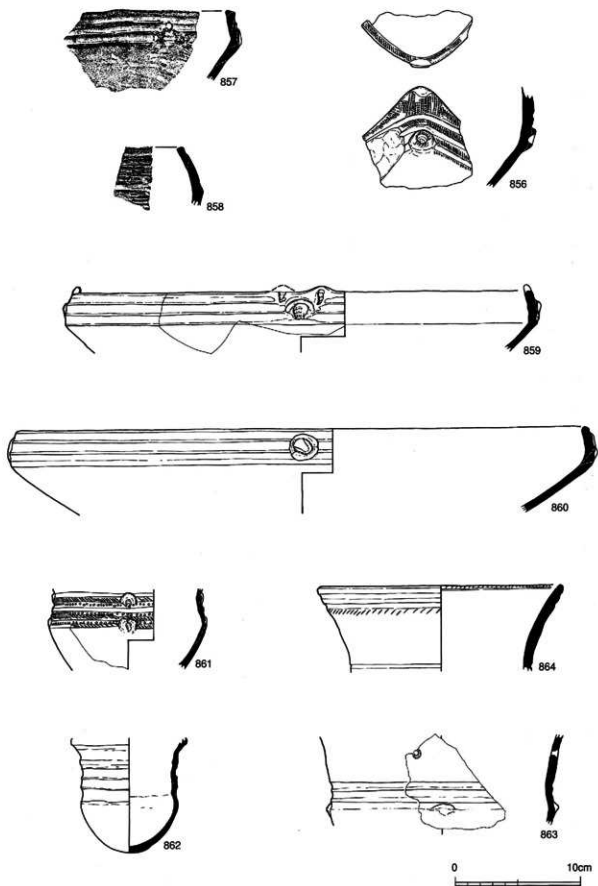


850

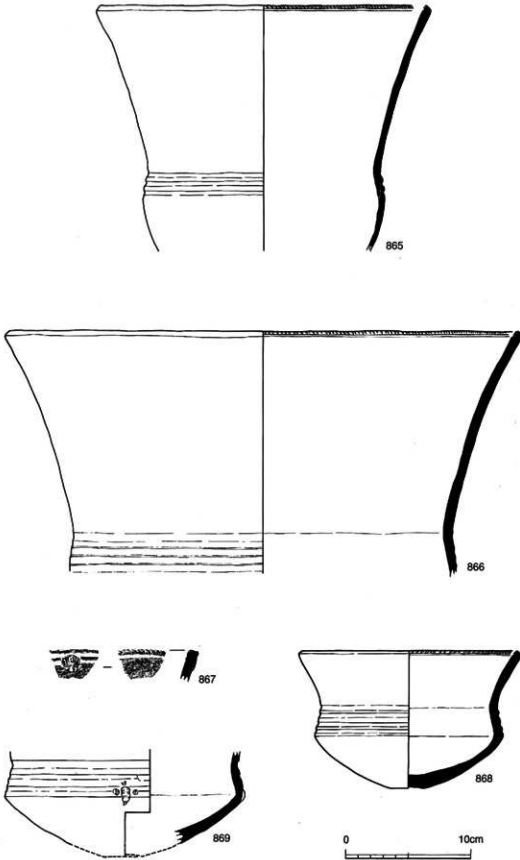
第145図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-25



第146図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-26



第147図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-27



第148図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-28

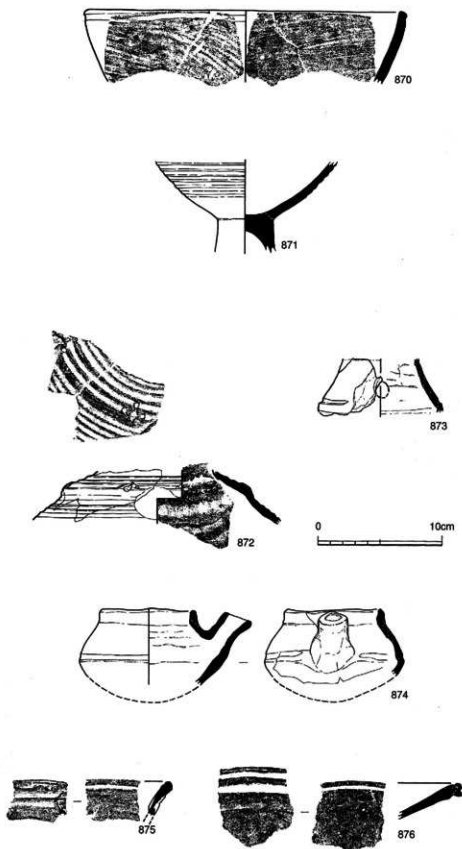
下を押さえる斜刻帯以外は無文である。848もまた胴部は無文。上半部を刺突沈線で囲い、上に刺突を施した瘤状突起のみ配される。胴部最上帯は平行刺突沈線間の斜刻帯である。

凹線文土器 文様描線に凹線を用いた土器で、専ら巻貝を施文具として太い沈線としたものである。〔凹線文土器Ⅰ類〕(856~860) ; 856は波状口縁浅鉢。上面観は方形を呈しよう。口唇部は凹線間、突起上には刻みが配される。波頂部には巻貝回転擬縄文、その下の屈曲上には巻貝殻頂刺突を有する瘤状突起を配置している。内面に赤色顔料の付着が認められる。857は平口縁深鉢となろう。口縁部には3本の凹線がひかれ、屈曲上に貼付された粘土瘤上に巻貝側面圧痕が圧される。なお、その周囲には3ヶ所の巻貝殻頂刺突も配される。この土器の凹線内には先描されていた沈線が残っており、その上を巻貝によってなぞった過程が窺われる。858は内屈する口縁の上下に離れて2本平行の凹線をひくもの。859、860は口縁部に3本の凹線をひく平口縁浅鉢。前者は上端に2個一對の小突起を配し巻貝側面圧痕、その間すぐ下には粘土瘤を貼付した上、扇状圧痕を施している。後者は巻貝側面圧痕を圧した上、その部分をも磨いた瘤状突起を付す。

凹線文深鉢胴部 (861~864) ; 861は頸胴部界も含め4本の平行する凹線がひかれ、下位3本の内には刺突列が配される。最上帯、最下帯およびその直上は斜刻帯とされ、1ヶ所のみ無文、刺突を施した瘤状突起も最上帯と最下帯とに貼付されている。小型深鉢の862は丸い底部から円筒状の頸胴部が立ち上がる。その部分に3条ほどの凹線が配されるが、場所によっては凹線が融合、分離し安定しない。器壁薄く特異な個体である。863には3本の平行凹線が配され、第3凹線に一部被さって、屈曲上に瘤状突起が置かれる。

〔凹線文土器Ⅱ類〕(864~869) ; 864は口頸部外面にも凹線施文をみる広口深鉢か。口縁内面は沈線で画した斜刻帯、外面には2本の凹線下に斜刻を配す。頸部にも凹線が配されている可能性がある。867も口縁外面に凹線施文があるが、さらにその上に粘土瘤を貼付の上巻貝側面圧痕を圧している。865、866の口縁部は内面斜刻帯のみの広口深鉢。胴部には3ないし4本の平行凹線をひいた上磨かれるが、刻みは施されていない。868は同様の文様構成の広口鉢。底部は径小さく、凹みは弱い。869が同器種の胴部で、屈曲部には巻貝側面圧痕および巻貝殻頂刺突が配される。

凹線文土器その他の器種 (870~876) ; 870は砲弾形を呈する鉢形土器で、口縁外面にのみ1本の凹線が配されている。外面は斜走向の巻貝条痕顕著。871は脚付浅鉢。口縁部がどのようなものになるかは欠損のため不明であるが、器体外面に少なくとも7本の平行凹線がみられることから判断して、波状を呈する大阪府・更良岡山(更荒寺)遺跡出土例に類似することはないものと考えられる。筒状の脚は内部空洞に作られる。それに直交する窓孔の有無も不明である。872は胴部UFO形を呈する注口付土器。肩部の上下とも多重平行凹線がひかれ、注口付け根部両側には粘土瘤上の巻貝側面圧痕および周囲に殻頂刺突が配される。なお、破片上端の破断面は上を向いており、延長して立ち上がる様相がある。以下残存部を胴部としてラッパ状に広がる口頸部が推定されるので注口ⅡB類に分類される。鳥根県・森遺跡出土土器や富山県・井口遺跡出土土器が類例となろう。873、874も注口付土器。両者とも腹部屈曲部直上に1本の凹線を配すが、器形は異なる。両者とも胴部上半内面の粘土紐接合痕を明瞭に残す。外面は一樣に丁寧な調整が施される。875、876は宮滝式に比定されよう。前者は断面「レ」字状の凹線を外面に配すⅡ類口頸部。その上には直に扇状圧痕が圧される。口縁内面は口唇部に向い外反しており、上端近くに1本の凹線のみひかれる。後者は広口浅鉢か。外面には1本の凹線、内面上も上端近くに1本、さらにまた、肥厚した口唇部にも凹線が配される。内外面とも丁寧な調整されている。



第149図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-29

縄文地土器 (877~881)

沈線等による積極的施文はみないが、縄文が施される土器。

877と879は口縁部屈曲直上に縄文施文後、1本の沈線をひいている。ただし、磨消等は見られない。前者は波状口縁深鉢で、縄文は直前段4本摺RLを用い、沈線は右端を刺突する。後者の縄文はLRにR1を逆巻きに付加したもの。沈線は巻貝を工具としている可能性がある。浅鉢か。878から881は口縁部および胴部に縄文施文をみる平口縁深鉢。用いている縄文はそれぞれ、878はRL、880は直前段3本摺LR、881はR1とLRを左摺りとしたものと思われる。878の縄文原体は粗い。

その他の土器 (882、883) ; 882は縄文が施文された体部破片。縄文原体は2本のLRとLLをもって直前段3本の右摺りとしたものであり、本遺跡では一例しか検出できなかった。883は断面三角形に内面を肥厚させた内彎気味の口縁部で、緩やかな弧を描く波状を呈す。上端外面には口縁に添合わせた1本の沈線を配し、その間に穀粒状の浅い刻みを充填する。小破片ではあるが波状口縁深鉢となろう。西野秀和氏による石川県・米泉遺跡出土土器の分類における酒見式第2段階、「波状深鉢1類E」にあたるか。467などと同一個体であるかもしれない。

無文土器 沈線等による文様をもたない土器。ただし、粗製土器の謂ではなく、条痕を顕著に残すものから、丁寧にナデ調整を施されたものまで一括している。器形に基づき三大別の上、有文土器同様の口縁部形態、さらに体部形態により分類解説を加える。体部形態は頸胴部界の有無により、頸胴部分帯型のA類、頸部をもたないB類に分けられる。ただし、この二類の境界は漸時的である

無文深鉢形土器

II A類 (884~909) ; 口頸部が外傾して立ち上がる広口深鉢にあたる。頸部と胴部との境は段やくびれをもたせて明瞭に遡るものから、調整のみにて辛うじて判別しうるものまでである。884から889は口径40cm前後を計るものである。884の口縁部は内彎するもので、内外面とも横走するケズリ調整。外面のそれは粗く、巻貝の擦痕も一部に認められる。角閃石を多く含む褐色を呈す。所謂生駒西麓産の胎土を用いて製作されたものか。885から887は頸胴部の境ははっきりせず、若干のくびれの部分で調整方向を遡っている。885の口頸部外面は横走向巻貝条痕後ナデ調整、胴部は右下から左上方へと向う巻貝条痕調整を施す。内面はナデであるが、胴部にいたっては調整丁寧である。886は口縁部、頸部、胴部と方向を遡る器体軟質時のナデ調整。一方、内面には幅1.8cmから2.3cmの若干弧を描く板状工具を用いたケズリ痕が認められる。887は若干くびれをもつ胴部であるが、その腹部に横走向巻貝条痕がみられ、その上下の調整方向を遡っている。888、889は頸胴部界を1条の凹線で面す。後者のそれは巻貝の側面を器面に当ててひいた様子が観察され、約4cm間隔に右から左方へと継ぎ足してなるものである。890から894は口径30cm前後となる一群。890は頸部にくびれはあるものの、胴部下半から口縁部付近まで一連の巻貝条痕をもって仕上げ、その後口縁部の横走向の条痕を施す。また、角閃石を含み黒色を呈しており、所謂生駒西麓産胎土に類似する。891は条痕調整ではあるが、工具に二枚貝を使用したことが明瞭な数少ない例である。腹部で調整方向を変えている。892は頸胴部界に1条の凹線を配す。その上下は条痕の方向が異なる。893は段で面すが、ほかとは異なって胴部の側が低い。896から906は口径20cm前後を計るものである。896から899はくびれおよび調整で頸胴部を両すもので、その他は段または1条の凹線で明瞭に面している。896は胴部下半に縦位に近い左下がり斜走向の巻貝条痕を施す例であるが、胎土に結晶片岩を含んでおり、紀ノ川流域との関連を窺わせる。897は幅1.9cm前後と推定される板状工具により内面を調整するが、外面は器面軟質時における粗いナデ。底部は丸く収まる様

相をみせる。898は口頸部に縦走するナデを施している。900の頸胴部界は段によって画されるが、それは胴部に巻貝条痕調整を強く施し、頸部を削り出すようにしたもの。口頸部ならびに腹部以下はなで消されているほか、胴部下半の器壁は極端に薄手である。901から903および906は巻貝条痕地に1条の凹線をひく。ただし、903のそれは889以上に巻貝の側面を当てひいた様子が明瞭に残る。口頸部が短い904も巻貝の当てひきにより段を作出したもので、右から左方へ3～4cmごとに継ぎ足していく様が観察される。906においてはやや強めのナデによって画しているが不明瞭である。907は口径11.5cm、この器種では小型の部類に属す。口頸部は大きく歪んでいる。また、4単位の波状口縁となる908も小型品である。

II B類 (910～913)；砲弾形を呈する深鉢ないし鉢形土器で、口径は13cmから25cmを計り、いずれも斜走する巻貝条痕顕著である。ただし、912は比較的厚手の口縁が直行して立ち上がる鉢形土器で、ほかとは若干様相が異なっており、内外面ともナデ調整が施されているようである。911は908とともに深鉢形であるが、外面は横走向に巻貝条痕が施されている。910、913は類似した形制、条痕方向をとる鉢形土器であるが、前者の底部周壁調整は胴部調整以前におこなわれている点に相違がみられる。また、この個体は歪みも大きい。

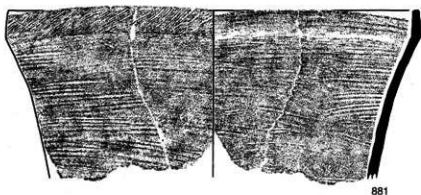
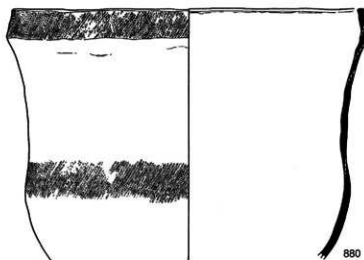
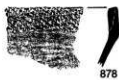
I A類 (914～927)；914から918は内屈口縁の波状口縁深鉢。914の口縁部以下は若干くびれるのみで、内傾したまま底部にいたるものと思われる。波頂部は肥厚気味につくられ、直下に「ノ」字状凸帯が配されている。胴部外面は条痕後のナデ調整。一方において915から918は口縁部を内屈させて設けるほか、胴部も屈曲させる。916は小型ということもあってナデ調整を主体とするが、その他は口縁部以外の外面に巻貝条痕を顕著に残す。内面調整については他の深鉢同様の胴部ナデとするもののほか、918のように胴部にのみ条痕を顕著に残すものも存在する。917、918の頸胴部界には1条の凹線が配されている。

919から927は平口縁深鉢。925、927などを除くほとんどが、頸胴部を段ないし1条凹線によって画している。919から923は口縁部の屈曲も比較的明瞭で、特に919などは内彎内屈口縁である。それは口縁部および胴部に巻貝条痕を顕著に残すが、頸部は丁寧になでられている。また、その頸胴部界は段によって画される。これと同様の調整をとるものに920から922があり、これらの頸胴部界は1条の凹線に類似しながらも段を作出している。923も1条の凹線に類する段をもつが頸部は巻貝条痕顕著である。924は確実に1条の凹線。外面は前者同様頸部まで条痕をみせる。また、口縁部および胴部の屈曲も前掲のものに比較すると貧弱な感を与える。925の口縁部は外面に軽く段を設け、内面を若干内彎気味に仕上げている。927は小型品。条痕調整を基調とするが、外面は胴部下半を除いてナデ調整が施される。

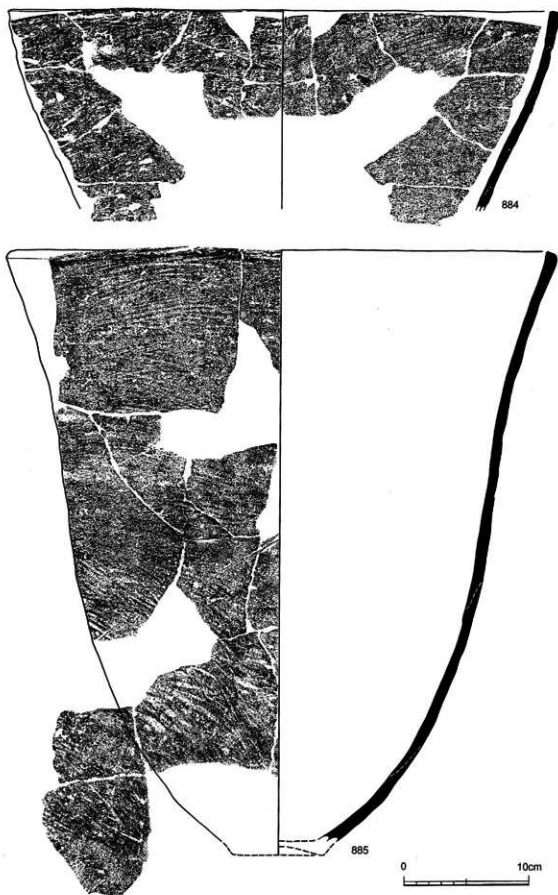
無文鉢・浅鉢形土器

II A類 (928～935)；928は口縁部が内彎し、外面もそこだけ二枚貝条痕地の頸部とは違えてなでることから、I A類の鉢形土器とすることもできる。一方、929以下は典型的なII A類の広口鉢である。口径は10～20cm前後で、器高はその3分の2程度。器面調整は横走する巻貝条痕を基調としながらも、それをなで消すものが比較的多いように思われる。932や933のように胴部を屈曲をもって作り分けるものと、丸く作るもののある点は、有文土器のそれと共通する。なお、この器種は内傾気味の胴部に外傾する口頸部が取り付くため、その境ははっきりしており、1条の凹線をもって画することは少ないが、931等の例もみられる。930は胴部内面に赤色顔料が付着している。

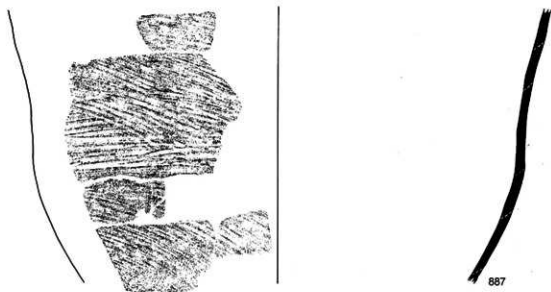
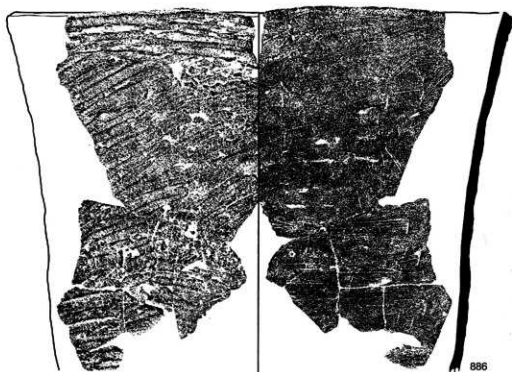
II B類 (936～952)；936、937は口縁内面にそれぞれ凹点、「ノ」字状凸帯を配すもので鉢形土器か。



第150図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-30



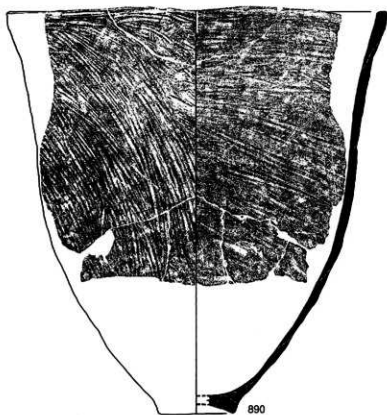
第151図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-31



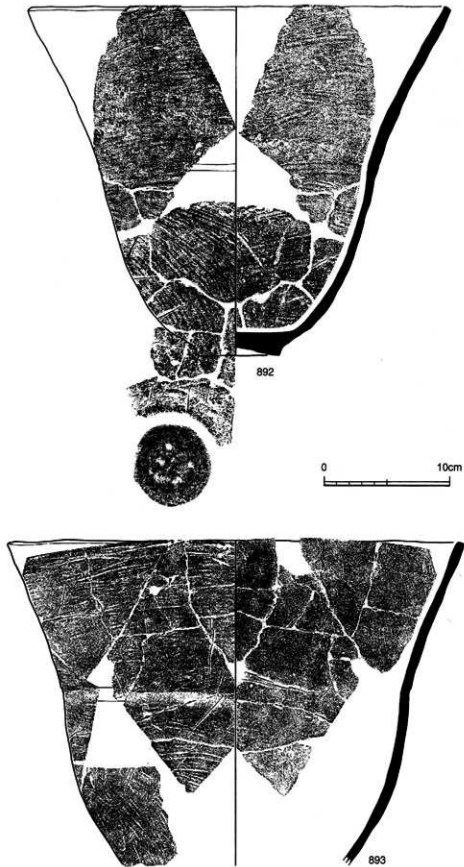
第152図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-32



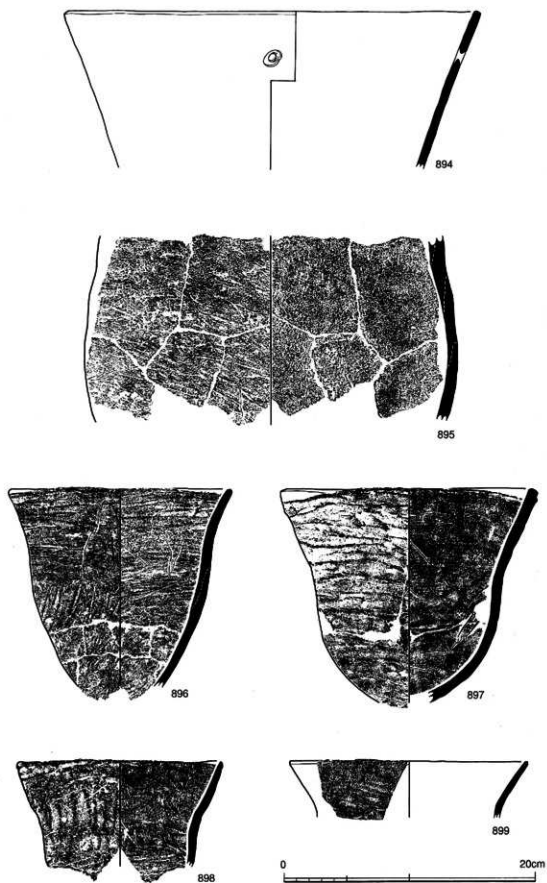
第153図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-33



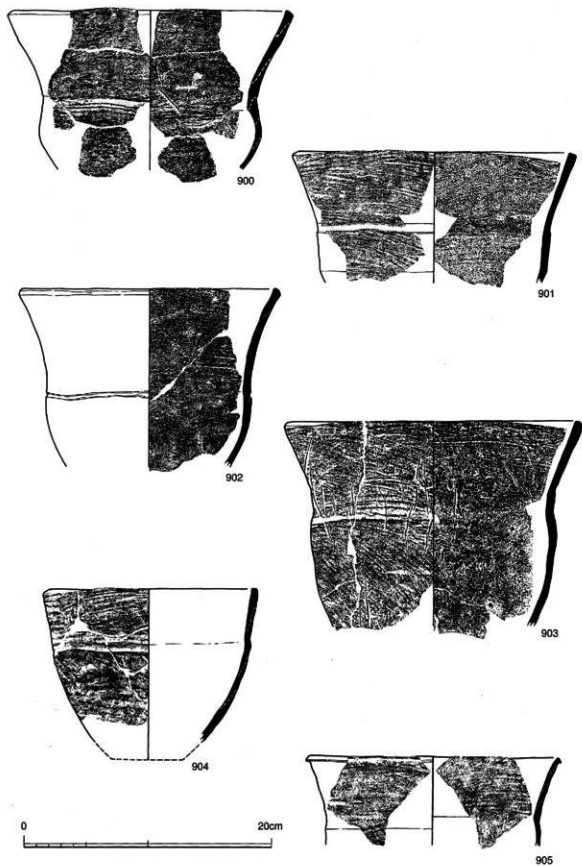
第154図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-34



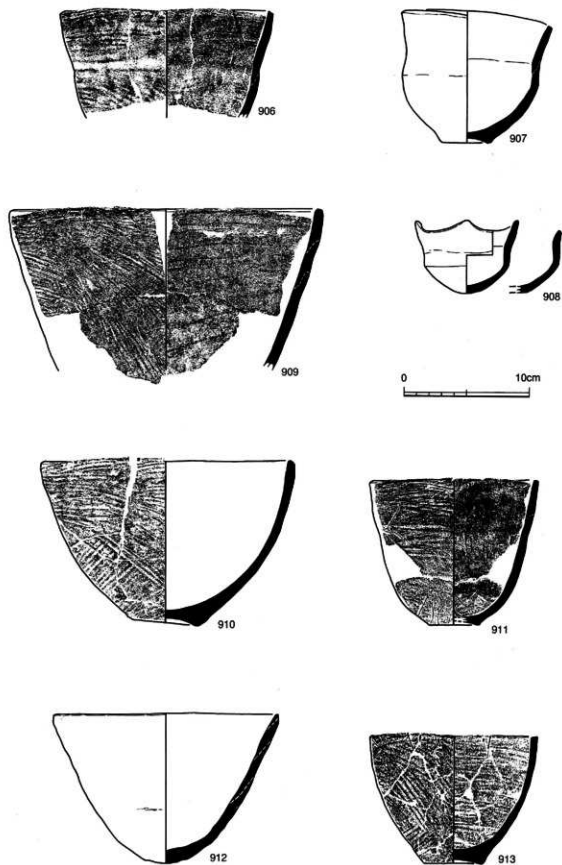
第155図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-35



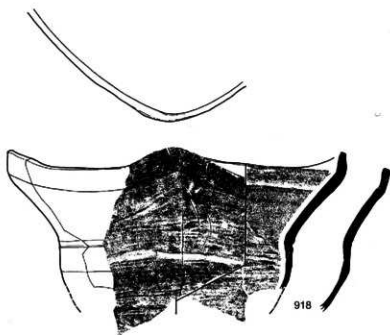
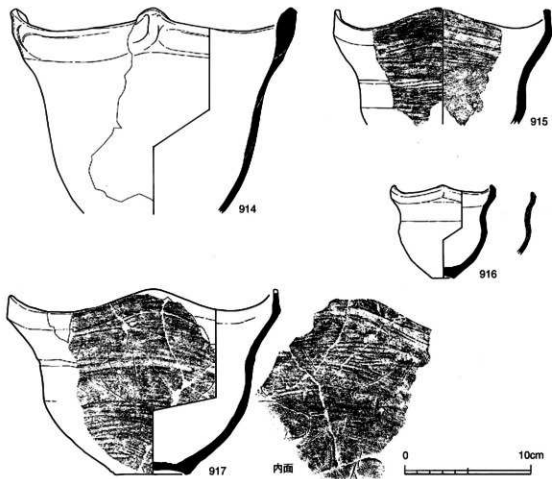
第156図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-36



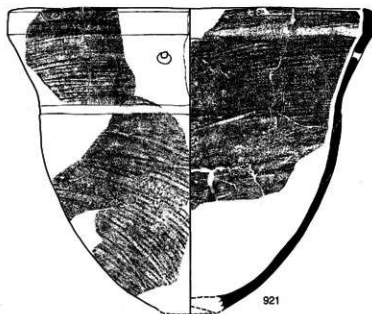
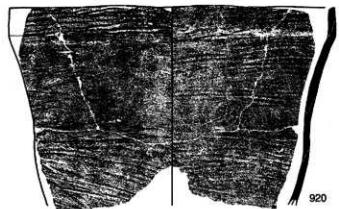
第157図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-37



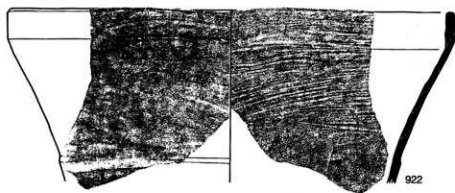
第158図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-38



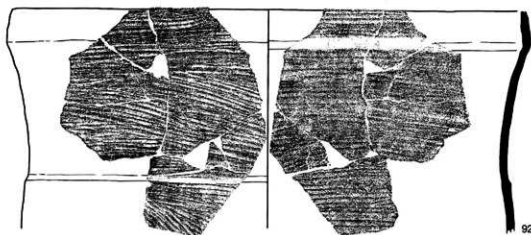
第159図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-39



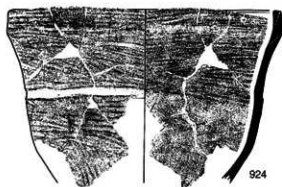
第160図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-40



922



923



924



925

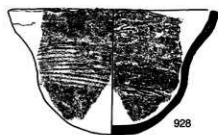


926

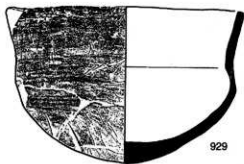


927

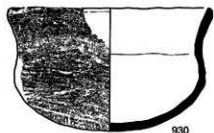
第161図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-41



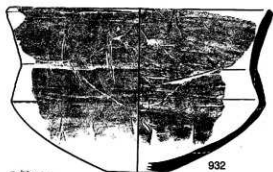
928



929



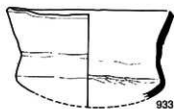
930



932



931



933



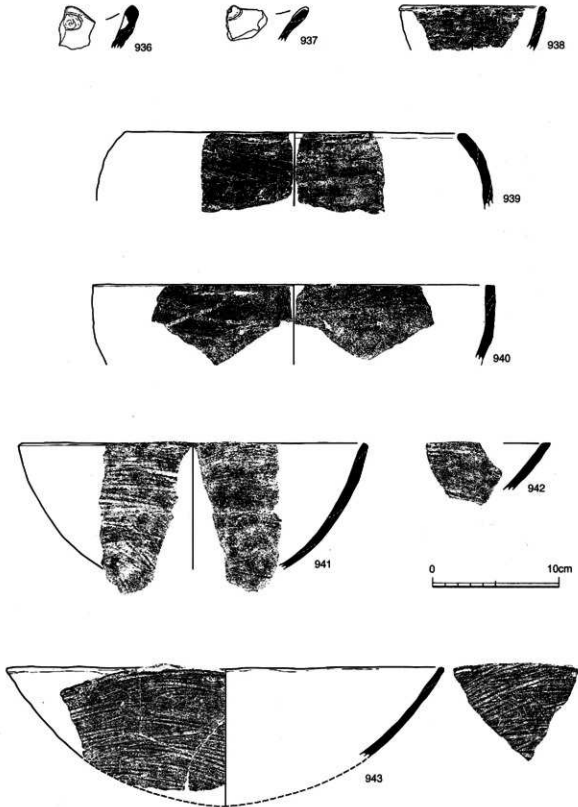
934



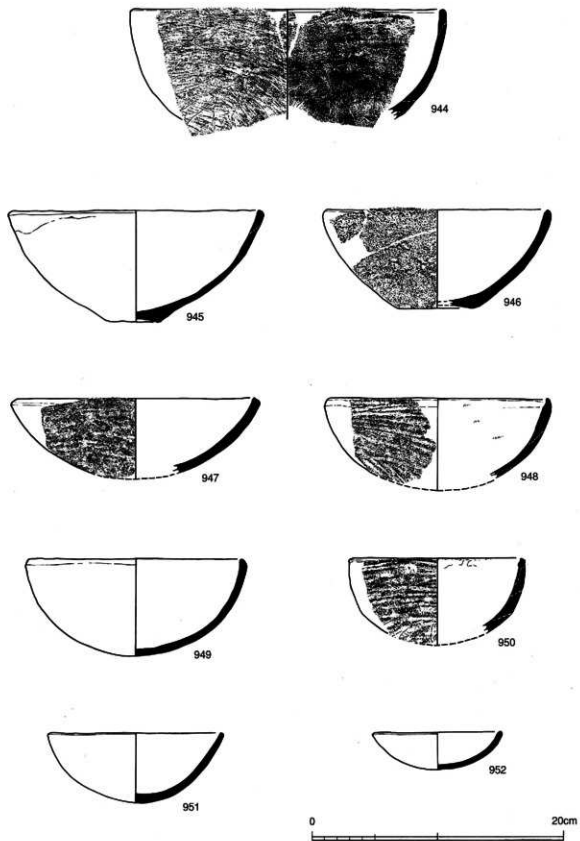
935



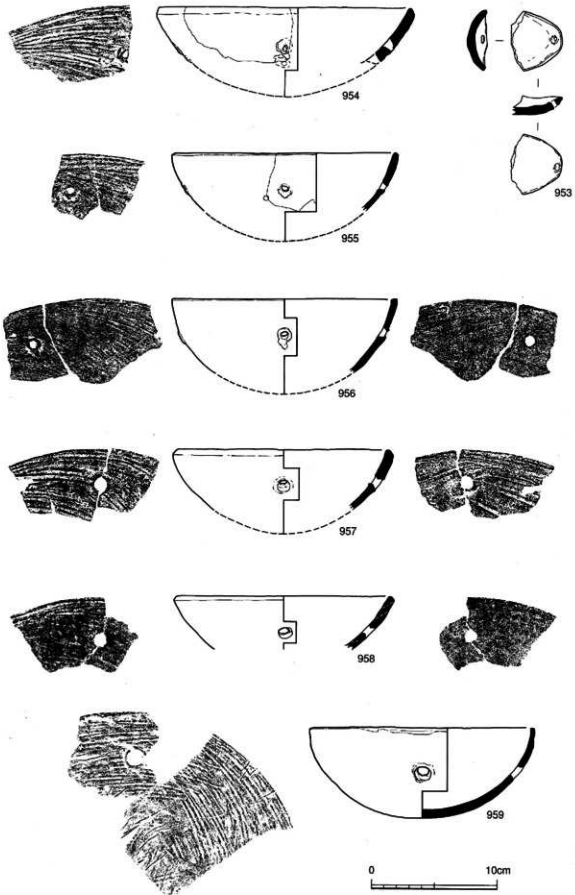
第162図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-42



第163図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-43



第164図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-44



第165図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-45

938は内外面ナデ調整の小型鉢形土器で、内面に赤色顔料が付着している。939は口縁が内傾する点、特異な器形の鉢形土器。内外面ともなでられ、口唇部も天を向いてナデ面取りされている。

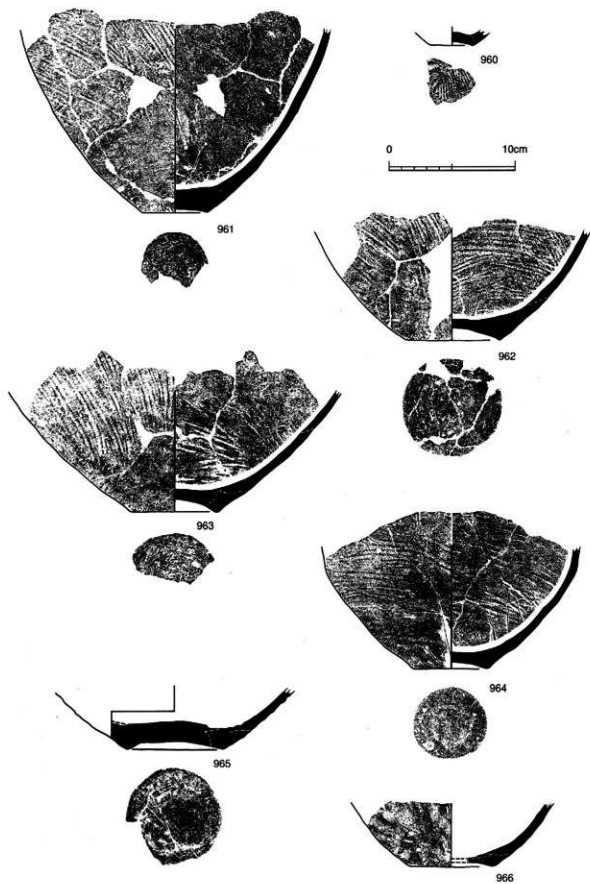
940から952が典型的な広口浅鉢である。一般的には口縁の開き具合と、口径および器高との関係から、「椀形浅鉢」、「皿形浅鉢」などと細分して呼称される。口縁部が直行気味に立ち上がり、口縁半径と器高が近い939や950は前者の範疇に入るであろうし、その他多くの広口浅鉢は「皿形浅鉢」と呼ばれよう。器面調整は概ね内面は丁寧に施されるのに対し、外面は条痕を多く残す。940、946、949から952などは外面にも条痕後ナデ調整を施している。943は内面にも顕著に巻貝条痕を残す数少ない例に属す。また、この個体の内面には赤色顔料の付着が認められるが、他に947から950も内面に赤色顔料の付着がみられ、その比率の高い点も本器種の特徴としてあげることができる。

ⅡB類：有孔皿形浅鉢（953～959）；本遺跡においては、ⅡB類広口浅鉢の中でも口縁部付近に焼成前に穿孔を施したものが特徴的に認められる。953は舟形を呈す上、小型で特異な例であるが、その他に21片の焼成前穿孔を有する皿形浅鉢が検出されている。954から959がそれであるが、口径は20cm前後、器高は約7cmにまとまり、内面は丁寧なナデ調整、外面は巻貝条痕調整を残す点も共有する特徴としてあげられる。穿孔は器面調整後に巻貝を用いて施されるようである。しかし、孔数は縦位に2孔あけるものと、1孔のみのもとの二者が明らかに認められる。前者の例には954のほか387、388があり、955も左右に振れるものと同類とできよう。これらの孔は共通して径が小さく、内面から穿孔されるものである。一方、1孔タイプは内外から穿孔され、孔径が比較的大きい。21片中5片の内面に赤色顔料の付着がみられ、954、956、957および959がそれに相当する。

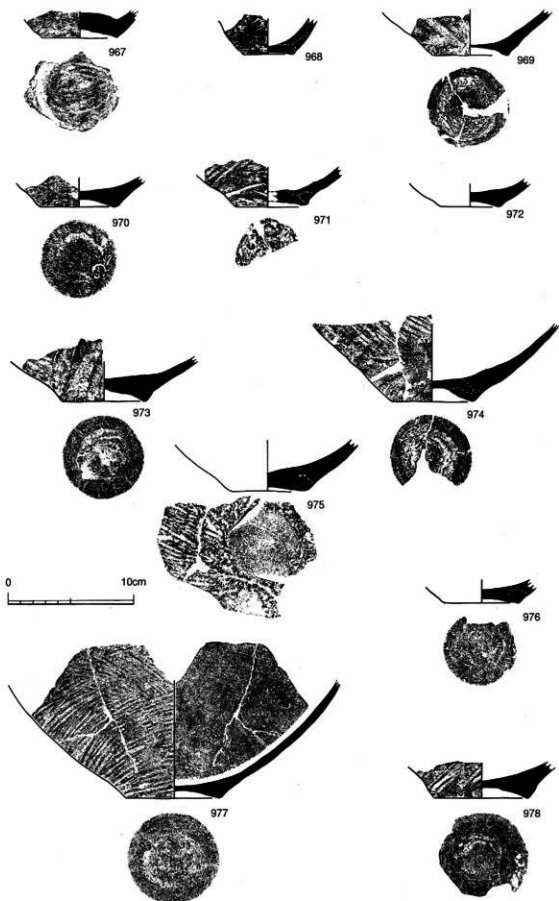
無文注口土器（851～853）；851は注口C類。内外面とも比較的丁寧な調整である。体部下半面にR1の縄圧痕がみられる。852は口縁部が内傾しつつ立ち上がる注口C類に相当する。体部上半内面は凹凸が目立つが、それ以外は丁寧な調整。底部は弱い凹底である。853は小型の注口部。付け根部は剥離したもので、その面に接着のためのものと考えられる数条の刻みがみられる。

深鉢底部（960～983）；器壁に接する外縁を水平に地につけ、底面中心部を凹ませ上げ底とするものが大半である。底径は上にある器体サイズにもよろうが平均すると6～7cmに集中する。凹んだ底面には中心部粗面、周囲平滑面となる二段構成のヘソ状凹底と全体がなでられたものが存在しており、後者の凹みは強くないのが一般的である。製作手法には何通りか認められそうで、接地する外縁部に粘土紐を環状に置いた上、中心部に粘土板を充填するもの、粘土円盤を中心に据え、周囲を取り巻くように器壁を積み上げていくものなどみられる。しかし、それが観察される資料は限られているため、ここでは底部と周壁形態およびその調整から分類し記述する。

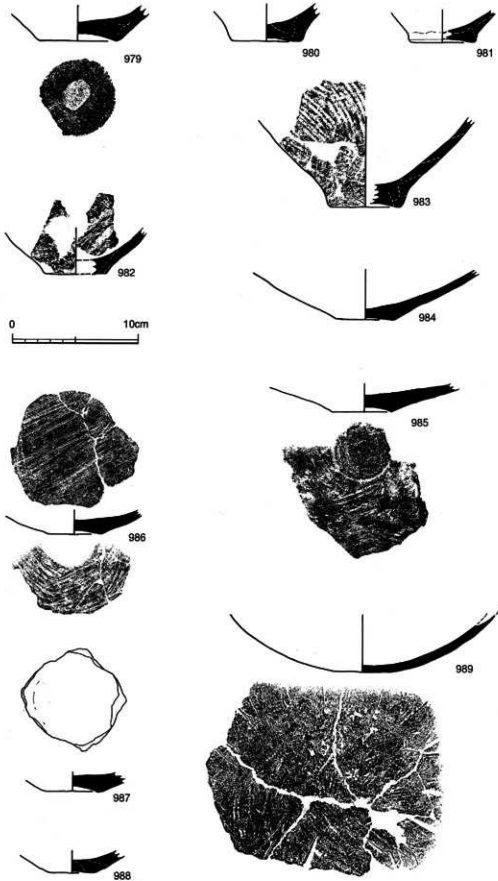
960から968は底部からスムーズに連続して、内彎しつつ立ち上がる胴部にいたるもの。これらの周壁外面調整は、胴部の斜走向条痕を整えるように横走向のナデまたはケズリを施したものが一般的である。962、963の内面には条痕が残るが、後者のそれは二枚貝を工具としたものである。また、960は底面に二枚貝による条痕が施され、965は底面に木の葉痕が圧着している。969から983は底部が周壁に対し突出気味になるもので、底部外縁から胴部にいたるまでの過程で一度は器壁が外反する。周壁調整には横走向になる969から972、胴部の斜条痕に直交して左下がりの斜走向のナデを施す973、974、ナデではなく左下がりの斜走向に巻貝条痕を引き降ろす975から978等がある。980から983は底部の突出顕著なもので、底面の凹みは弱い。982は平底となるが、その面はケズリ調整となっている。なお、976および979は胎土に角閃石を含み、所謂生駒西麓産のものに似る。



第166図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-46



第167図 南区縄文下層8・10層出土土後期土器-47



第168図 南区縄文下層8・10層出土後期土器-48

第3節 土器・土偶

浅鉢底部(984~989) ; 984から988は弱いながらも凹底、989は丸底である。凹底の底径は5cm以下となるものが多く、底面は全面までられている。986は内面にも巻貝条痕がみられる例で多くはない。987は内面に赤色顔料の附着がみられる。989は丸底であるが、底面になる辺りに近接して直径3.5cm程度の円形平坦面が3ヶ所観察される。

9. 縄文下層南区出土の土製品(第169・170図)

D1は大小9片からなる土偶であり、本遺跡から出土した土偶では最も大型である。接合する破片では全長13.8cm、最大幅11.4cm、最大厚6.8cm、をはかる。この破片は大きく膨らむ両脚と脚の付け根でくびれ、こもり膨らむ下腹部からなる。なお明らかに同一個体と考えられる肩部および腕から脇部の破片を合成した場合の寸法は、高さ21.4cm、幅15.5cmである。完形品を想像すると、全長27cm前後、両手の幅21cm、厚さ7.2cm程度になる大型の土偶と考えられる。

形態から見ると、大部分が剥がれた面が正面になる。これは脚部の盛り上がりと背面と考えられる面が平坦であることから判断できる。これは脇および腕の破片においても、正面と考えられる箇所が膨らみ、肩部背面と考えられる破片は平坦になっている。脚部はそれぞれふくらはぎが大きく膨らみ、足首はすぼまり、平坦で安定する脚台状のつまさきにいたる。両脚は股部が接しており、接合面が股中央まである。現存する破片からすると脇はすぼまり、胴部上半はやや広く大きい。脇および肩部から考えると上腕部はから両脇を開け手先にかけてすぼまる。

成形としては土偶の剥離面や断面からすると粘土の厚さは均一ではない。また規則的な粘土の継ぎ目がないことや内部が空洞状態ではあるものの、その厚さが不均一であることから、中実であると考えられる。おそらく脚や胴部の内部は焼成がいきとどかず、生焼け状態であり、溶けてしまったものと考えられる。

文様や表現は正面の残存部が少なく主要な文様は不明だが、残存状態の良好な脚部から見れば、脚の付け根には正面から縦線、脚付け根後部にかけてヘラによる細線が3条描かれ、ヘラによる斜め方向の刻み目が密に入れられている。脚正面には足首から縦長に円弧のヘラガキ文があり、上部には数カ所の刺突が認められる。足首にはヘラによる細線が廻り、密な刺突が廻る。下腹部背面左右には外に向かう弧状の細線が2条あり、擬縄文が配されている。また背骨に相当する背中中央に縦方向の沈線が見られ、側面には若干太い沈線内に刺突が認められる。下腹部の厚さからすると外側には2条で構成される文様と考えられる。肩部には下腹部と同様の弧状文が入れられ、おそらく脇まで至るものと考えられる。肩部に相当する2片の外側にはやや細い沈線内に刺突があり、2片の位置関係から肩部外側には2条の文様があると考えられる。

粘土は直径1mm前後の長石や石英を多数含む。また土偶外面の色調は10YR7/2にぶい黄褐色で、内面は10YR4/1褐色を呈する。右脚内側及び左脚後方に黒斑が認められる。

時期としては各破片の出土位置が南区L20~22、M20区にまたがり、層位は縄文黒色1・2層目がほとんどであることから、縄文後期元住吉山I式期の範疇と考えられる。

D2は1片からなる土偶であり、土偶としては中型である。全長4.7cm、最大幅4.6cm、最大厚1.9cmをはかる。頭部と胴部右及び両足を欠損するが、全長は10cm程度のものと考えられる。また欠損する片腕を復元すると、両手間は8cm程度と考えられる。

形態から見ると、残存部は手先と左半身であり、頭部、右半身及び両足を欠損する。胴部は立体的で

肩部及び足の付け根付近は肉厚になっている。手先は欠損しているが脇および肩部から考えると上腕部から両脇を開け、手先にかけてすままる。また背面下部は僅かにくぼむ。

成形は欠失している前面部の粘土の状態から中実と考えられ、特に分割技法などは認められない。

文様としては正面が欠損するため表現は不明だが背面部の肩部上面から足の付け根付近まで2条の押し引きによる刺突文が施文されている。この文様は肩部上面まで残存していることから前面にも施文されている可能性がある。

胎土中には直径0.5mm程度の石英や長石の砂粒を含む。土偶の外面の色調は2.5Y6/3にぶい黄色や2.5Y4/1黄灰色を呈し、内面は7.5Y6/2灰オリーブ色である。

出土位置は南区N21区で、出土層位は縄文黒色上層の青灰色シルトであることから、縄文後期元住吉山Ⅰ式期の所産と考えたい。

D3は土偶の手または脚部と考えられ、全長3.1cm、幅1.7cm、最大厚1.4cmをはかる。

形態としては残存部の断面は楕円形で残存部の中央にて若干湾曲し、先端にかけて厚さが薄くなり丸みを帯びる。

胎土中には直径0.2～1.0mm程度の石英やチャート、長石の砂粒を含む。色調は7.5YR6/3にぶい褐色を呈する。

時期は出土位置が南区K20区で、出土層位は黒色包含層であり、縄文後期元住吉山Ⅰ式土器が多数出土した土層であることから、当時期の所産と考えられる。

D4は土偶の手または脚部の破片と考えられ、両端が欠損する。残存部の全長3.3cm、幅1.7cm、最大厚1.3cmをはかる。

平面のAはやや凸状で、B面は扁平であり、下方はややすままる状態であることから、先端に近い。両側面には指による押しえが見られ、内面と考えられる箇所にはやや大きな凹みがみられ、外側には僅かな凹みがある。断面形態はほぼ楕円形を呈するが、平坦な部分も2ヶ所ある。上端に平行してヘラによるやや弧状を呈する沈線がB面に見られ、脚付け根付近の装飾文の可能性もある。

胎土中には直径0.5～1.0mm程度の石英やチャート、長石の砂粒を含む。色調はA面は2.5Y7/2灰黄色を呈し、B面は10YR7/3にぶい黄褐色を呈する。

時期は出土位置が南区K20区で、出土層位は黒色包含層1回目であり、縄文後期元住吉山Ⅰ式土器を主に元住吉山Ⅱ式を含む土層であることから、当時期の所産と考えられる。

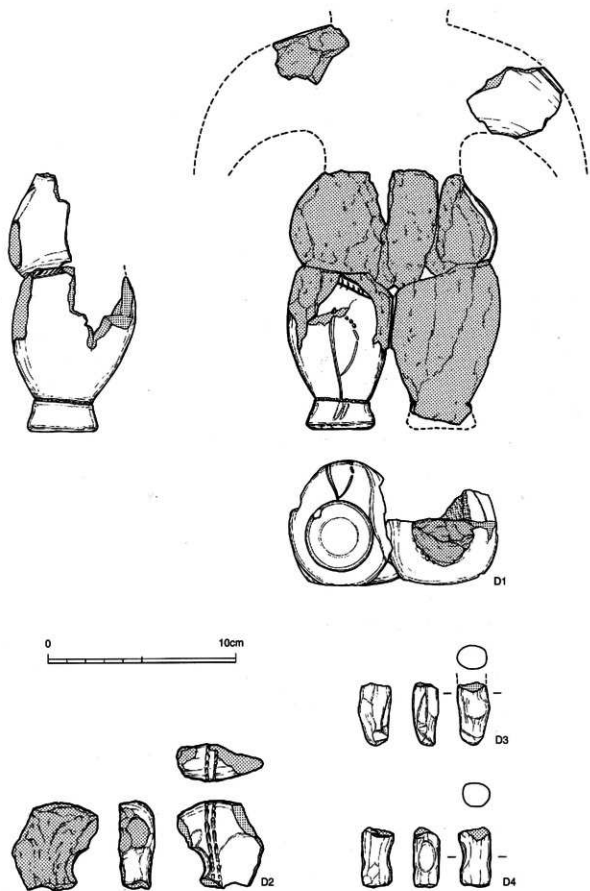
D5は直径3.15cm、最大幅1.5cm、中心厚0.55cmをはかる耳飾り（耳栓）であり、本遺跡唯一の耳栓である。形態としては外周両端が突き出し、外周中心部は凹線状に窪み、両面は大きくなだらかに凹む。文様表現はないが、表面は丁寧に磨かれている。

胎土には0.2mm程度の石英の砂粒を少量含むが、精製された粘土が使用されている。色調は7.5YR4/1黄灰色を呈し、焼成は良好である。

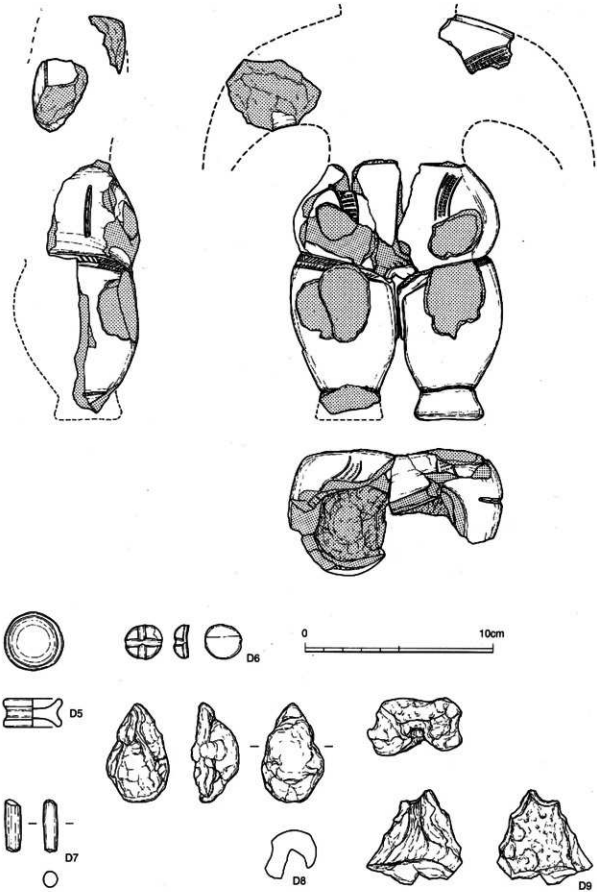
出土位置は南区M20区で、出土層位は縄文黒色4回目であり、縄文後期元住吉山Ⅰ式期のものと考えられる。

D6は直径1.8×2.0cm、最大厚0.7cmをはかる装飾品である。湾曲する外面と僅かな屈曲部をもつ内面からなる。外面には棒状工具による十字方向の沈線があり、側面外周にもわずかに窪んだ沈線が巡っている。なお内面周縁には割れた痕跡が見受けられることから、土器等の装飾部の可能性もある。

胎土には0.5mm程度の石英、チャート、長石を含む。色調は外面5Y2/1黒色を呈し、内面は10YR6/2



第169図 南区縄文下層出土土製品-1



第170図 南区縄文下層出土土製品-2

第3節 土器・土偶

灰黄褐色を呈する。焼成は良好である。

出土位置は南区L21区で、出土層位は縄文黒色砂層の黄褐色土上面で検出した。縄文後期一乗寺K式～元住吉山I式I期のものと考えられる。

D7は断面形が0.75×0.85cmで円形に近い楕円を呈し、長さ2.8cmをはかる棒状の土製品である。両端は欠損しており、下方が僅かにすぼまる。

胎土には0.2mm程度の石英を少量含む。色調は10YR7/2にぶい黄橙色を呈する。焼成はややあまく、やや不良である。

出土位置は南区M20区で、出土層位は縄文黒色3回目である。出土層位からすると縄文後期元住吉山I式期の所産と考えられる。

D8は全長5.3cm、最大幅3.3cm、最大厚2.5cmをはかる焼成粘土塊の完形品である。成形は手づくねであり湾曲する外面と大きく窪む内面からなる。目的をもって作られたものかは不明だが、直径6cmの粘土板を先端寄りに両側からつまみあげ、内面は谷部を呈している。また外面には粘土塊を重ねている。調整は明瞭な指紋もみあたらないが、一部ヘラ状の工具の痕跡が認められる。

胎土には0.5～1.0mm程度の石英、0.3mmのチャート、長石を含む。色調は内外面共7.5YR7/2明褐灰色を呈し、焼成は良好である。

出土位置は南区L20区で、出土層位は縄文黒色粘質1回目であり、縄文後期元住吉山I式或いはII式期のものと考えられる。

D9は全長5.08cm、最大幅5.0cm、最大厚2.7cmをはかる焼成粘土塊の可能性のある破片である。手づくねであり、2cm程度の厚い粘土を中心にひねり上げ、絞り痕をもつ。内面絞り痕の中心には空洞部があり、直径6mmの孔がある。ほぼ平坦な外面と大きく窪む内面からなる。外面には多数の凹みがあり、調整痕が見受けられない。内面は孔を意識させたものと考えられる。これらは目的をもって造られたものかは不明である。

胎土には0.5～1.0mm程度の石英、長石、0.5～1.0mmの赤グサリ礫を含む。色調は内外面共7.5YR7/2明褐灰色を呈し、焼成は良好である。

出土位置は南区L20区で、出土層位は縄文黒色粘質1回目であり、縄文後期元住吉山I式或いはII式期のものと考えられる。

第4節 石器

(山本)

1. 打製石器の分類基準

個遺跡から出土した打製石器のうち、第一段階の作業として、「石鏃 (AH)」や「削器 (スクレイパー : SC)」などの道具としての「器種」が認定できるものを抽出した。この段階で、加工痕剥片・使用痕剥片も器種と認め、抽出作業を行った。第一段階で器種として認定したものは以下の通りである。(なお、楔形石器の認定については後に詳しく述べてい)

石鏃 : AH、石錐 : DR、石匙 : SC'、削器類 : SC、加工痕のある剥片 : RF、
使用痕のある剥片 : UF、楔形石器 : PS、尖頭器 : PO

その後、第一段階で器種と認定できなかったものを「石核 : CR」または「剥片」に分類した。この分類基準は、「その石器の最終の剥離面が背面 (ネガティブな剥離面) のもの」または「その石器の主要剥離面 (腹面) が他の剥離面によって切られているもの」を「石核」とし、「その石器の最終の剥離面が腹面 (ポジティブな剥離面) のもの」を「剥片」とした。「剥片」のなかには、大形で重量のある剥片や、傘大程度の大礫 (重角礫) を複数に分割したものが一定量存在している。これらは明らかに石器 (石核) の素材と認められるもので、土坑内に一括埋納しているなど、石器を直接製作するための数センチ程度の「剥片」とは異なるため、「分割原石 : DM」として器種を認定した。

【石器】

↓

第一段階作業 (器種の認定)

①道具として調整加工したもの (石鏃・尖頭器・石錐・石匙・削器類・加工痕のある剥片)

②道具として使用し、使用の痕跡が残るもの (使用痕のある剥片・楔形石器)

↓

第二段階作業 (剥片・石核の分類)

①最終剥離面が腹面 (ポジティブな面) : 剥片⇒狭義の「剥片」

⇒分割原石

②最終剥離面が背面 (ネガティブな面) : 石核

石鏃 (AH)、石匙 (SC')、楔形石器 (PS)、石核 (CR) 分割原石 (DM) については、以下のよう形態分類の基準を設定した。(以下の各章においての石器の分類も同様である。)

a. 石鏃の形態分類 (第171図)

個遺跡では、各文化層から、400点近くが出土した。ここでは、先学の研究・調査 (鈴木1983、藤原1988、大阪市文化財協会1993など多数) を参考にし、今回出土した石器の石鏃を先端部 (刃部) 形態と

第4節 石器

基部形態に着目し、次のように分類した。

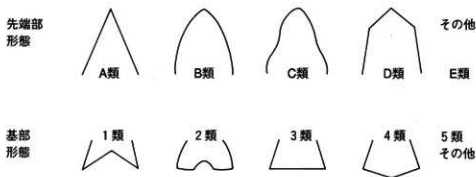
先端部形態

- A類：2側縁が直線的な鋭角をなすもの。
- B類：2側縁が湾曲し、丸みのある先端をしめすもの。
- C類：両側縁がS字状を呈するもの。
- D類：逆ホームベース状を呈し、先端部に肩が張るもの。
- E類：その他分類不能なもの。

基部形態

- 1類：中央部に挟りがあるいわゆる凹基で、両端が尖るもの。
- 2類：1類と同様凹基で、両端が丸みを帯びるもの。
- 3類：基部が平坦で、これまで平基と呼んできたもの。
- 4類：中央部が突出し、凸基と呼んでいるもの。
- 5類：その他分類不明なもの。

先端部形態と基部形態を組み合わせ、A1、A2、A3、A4、A5、B1、・・・E4、E5まで25の類型に機械的に分類できる。



第171図 石錘形態分類

b. 楔形石器の認定と形態分類 (第172図)

楔形石器は、「1辺が2~3cmの扁平な長方形の石器で、向かいあった2辺の縁辺部に階段状の剥離痕が対となる特徴がある。また、対辺どうしを直線的に結ぶ剪断面が形成されることも多い。」と説明されてきた(鈴木1991)。また機能については、「この石器の両端に残された階段状の剥離痕や、剪断面など製作あるいは使用時に形成された諸特徴によって、これは何かを割るためのクサビ(間接具)に用いられた(岡村1983)」と考えることができそうだ。個遺跡では、石器の1つ以上の縁辺に、微細な階段状剥離の観察可能な、「楔形石器」と考えられる石器が多数出土している。平面形態が長方形や正方形の「楔形石器」はもちろん、不正形であっても、縁辺部に微細な階段状剥離の痕跡をとどめているものも数多い。また、相対する縁辺以外にも微細な階段状剥離をとどめるものも数多く認めることができる。

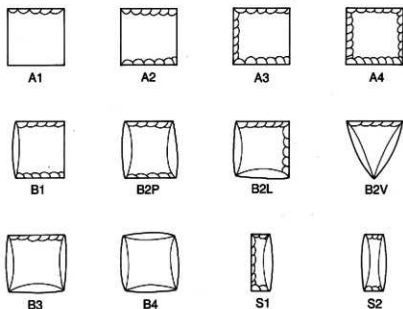
縁辺に微細な階段状剥離を認めることができる石器のうち、1つ1つを観察すると、長方形ないし正方形のものと、不正形のものとの厳密な分離は不可能であった。楔形石器の機能を考慮した場合、使用

によって形態が様々に変化することは容易に推定できる。また、本来の形態が意図された定型的なものであっても、使用の形態・頻度や、偶発的な剥離によって、形態が一定ではないと予想できる。以上の考えを元に個遺跡では、「1つ以上の縁辺に（微細な）階段状の剥離痕を有する石器は、楔形石器である」とした。

分類にあたっては、剪断面のないものをA類、剪断面の存在するものをB類、剪断面があり割片（スボール）状の形態と認められたものをS類と大きく3つに大別した。

A類は、階段状の剥離痕が確認できる縁辺の数で、A1、A2、A3、A4と細別した。B類は、剪断面の面数でB1、B2、B3、B4と細別し、B2類については、剪断面が相対する2辺に平行なものをB2P型、隣り合った2辺にL字状に剪断面が存在するものをB2L型、剪断面がV字状に存在するものをB2V型とした。S類は、剪断面が1面のものをS1型、2面のものをS2型とした。

A類は比較的正方形、長方形など、定型的なものが多く、また剪断面がないことから、使用直前または使用開始直後の形態であると予想される。B類は、使用の結果生じたと考えられる剪断面によって、形態が不正形になり、「クサビ（間接具）」としての機能を失ったものも数多く存在すると考えている。



第172図 楔形石器分類

c. 石核の形態分類（第173図）

石核は全てサヌカイトであるが、石核の形態分類にあたり、素材の形状及び割片の剥離の形態を基準とした。素材は以下のように3つに分けた。

R類：サヌカイトの円礫または亜角礫の原石を素材としたもの。これらの原石は個遺跡の存在する淡路島北部の山間部などをはじめとした礫層中に存在し、各河川の河口付近でも採集する事ができる。いわゆる「岩屋産」のサヌカイトと同様であると考えられ、淡路島内内の原石（「地元産の原石」）である。

D類：分割原石を素材としたもの。上記の円礫または亜角礫を分割し、石核の素材としたもの。上記の

第4節 石器

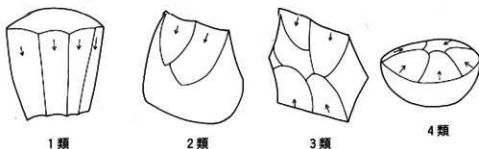
R類同様、「地元産の原石」であると考えられる。

F類：板状の剥片を素材としたもの。

石核に残された剥片剥離の形態は、以下の5つに分けた。

- 1類：縦長の剥片を連続して剥離するもの。旧石器時代に存在した「石刃石核」に類似する。
- 2類：石核素材の片側から打面と作業面を入れ替えながら剥離作業を行う、いわゆる「交互剥離（表裏交互に剥片を剥離する）」をおこなうもの。
- 3類：石核素材の両端から「交互剥離」をおこなうもの。
- 4類：石核素材の周縁から中央部に向かって剥片を剥離するもの。「求心状剥離」と呼ぶもの。
- 5類：その他分類不可能なもの。

素材の形態と剥片剥離の形態を組み合わせ、R1、R2、・・・D4、D5の15の形態に分類した。



第173図 石核分類

d. 分割原石の分類

これらの分類にあたり、1. 素材の大きさ、2. 分割形態の2つの項目で分類をおこなった。素材の大きさについては、拳程度の小形円礫を分割したと推定できるものをSRとした。石核の分類でもふれた「岩屋産」のサヌカイト原石を示している。BRは、人頭大礫以上のサヌカイト原石を分割したと推定されるもので、これらの産地は、後節に詳しいが、香川県坂出市周辺の金山・五色台であると考えられる。分割形態は、通常の剥片剥離分割したと推定できるものをSB、剥離面の中央部付近からはじまるリング・フィッシャーが観察され、「熱破碎」によって分割したものをHBとした。これら2者の組み合わせにより、BR/SB、BR/HB、SR/SB、SR/HBの4形態に分類可能となった。

2. 磨製石器の分類

磨製石器は、石棒類(SS)・石斧(AX)・ハンマー(HS)・石錘(SW)・凹石(SH)・磨石(SP)・石皿(砥石も含む:SD)と分類した。なお、石皿については、砥石と石皿の区別が厳密にはつかないと判断したので、名称を「石皿」と統一した。

3. 下層の石器組成 (第9～25表・第174～231図)

a. 3期(13～23層)の石器は、打製石器9点、磨製石器8点出土した。

打製石器は、石鎌3点、楔形石器5点、石核1点と、出土量は非常に少ない。石鎌は3点とも類型が異なり、この時期の特徴はつかみにくい。楔形石器は、5点のうち4点がB類である。A類は認められない。磨製石器については、石剣1点、石皿1点、凹石2点、石鎌4点である。石剣(S4043)は、緑色の結晶片岩で、淡路島島内には存在しない石材である。この結晶片岩は淡路島の南側に位置する沼島(ぬしま)または四国・徳島県に産出するようである。

b. 4期の石器は、打製石器87点、磨製石器11点の、計98点出土した。打製石器では大半が石鎌・楔形石器で、なかでも楔形石器は62点出土した。石鎌については17点の出土のうち、53%が2類である。楔形石器のA類は30.6%、B類66.1%で、3期では検出できなかったA類が一定量認められた。石核の4点のうち3点が準大礫の分割原石を素材としている。

この期に属する石皿4点のうち1点(S4040)は表面中央部に窪みをもつが、この部分に赤色顔料の付着が認められた。科学的分析の結果、水銀朱であることが判明した。また、この石皿の石材は花崗斑岩で、淡路島では南部の泉南層群(三原町・西淡町など)に、岩脈状で検出できるようである。

c. 5期の石器は、打製石器644点、磨製石器45点出土した。

打製石器の内訳は、石鎌194点、楔形石器388点と、この2者で打製石器の約90%を占めている。

石鎌194点を、先端部の各類型で見ると、A類75点(38.6%)、B類56点(28.9%)、C類45点(23.2%)、D類5点(2.5%)、E類13点(6.7%)となり、A類・B類・C類で石鎌の90%以上を占め、ややA類が割合的に多くなっている。4期の石鎌ではB類が半数を占めていた状況とは、5期では異なる様相を示す。また基部の形態に着目すると、凹基の1・2類が約70%で、4期の石鎌基部での割合とほぼ同じである。なお、1類と2類の比率は、5期から4期になると1類が約10%増加している。

L20・M20区では、この時期の包含層が厚いので、上位から回数区を区切って(1回目、2回目・・・と言うように)遺物の取り上げを行ったので、回数ごとに遺物実測図を並べてみた。が、回数ごとの特徴を抽出するにはいたらなかった。

楔形石器では、A類72点(18.6%)、B類298点(76.8%)、S類18点(4.7%)と、B類が圧倒的な多さを示す。その中で、S3265は、姫島産黒曜石を素材としたと考えられる。B類を細かく見ると、B1型が131点、B2P型が78点で、そのほか、B2V型34点(8.8%)、B2L型32点(8.2%)と続く。B1型とB2P型の2者で、この期の楔形石器の半数をしめる。この5期におけるA類とB類の長さ、幅、厚さ、重さの平均値を以下のように比較した。

第8表 南区縄文下層楔形石器平均値

	長さ	幅	厚さ	重さ
A類平均値	35.2mm	37.5mm	10.0mm	28.6g
B類平均値	32.6mm	31.5mm	9.5mm	13.2g
差	2.6mm	6.0mm	0.5mm	15.4g

第4節 石器

いずれも、厚さがほとんど変化してないことに比較して、幅や長さが増減し、重量ではA類とB類の差が大きく開いている。A類の平均値がB類の平均値をすべて上回っていることから、A類が使用により破損し、B類に変化していったことが伺える。楔形石器の本来の形態は、A類と言っても過言ではない。石核は7点出土している。円礫やその分割礫（分割原石）を素材とした石核であるD5型・R1型・R2型がそれぞれ2点ずつで、剥片素材の石核はF5型の1点しか検出できなかった。

分割原石は6点出土したが、そのうち4点は大形の剥片であり、科学的分析の結果、香川県産の金山・五色台周辺で産出するサヌカイトであることが判明した。中でもS3331は長さ34.8cm幅16.2cm、厚さ7.2cmで、重さは4820gである。S3332はこれに接合する。

石匙は8点出土している。「つまみ」部分を上方に置いた時、横長のものをW型、縦長のものをE型としたが、W型3点に対し、E型は5点とやや多い。

磨製石器では、石剣1点、石斧4点、ハンマー3点、石皿12点、凹石10点、磨石3点、石錘12点である。

d. 先行トレンチ出土遺物及び原位置を遊離した遺物の大半は南区の縄文下層に属すると考えられるので、一覧表及び実測図を参考に掲載した。

第9表 南区縄文下層3期石器組成表

打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	3	33.3	AX	0	
DR	0		SS	1	12.5
SC'	0		HS	0	
SC	0		SD	1	12.5
RF	0		SH	2	25.0
UF	0		SP	0	
PS	5	55.6	SW	4	50.0
CR	1	11.1	その他	0	
DM	0				
小計	9	-	小計	8	-

第10表 南区縄文下層4期石器組成表

打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	17	19.5	AX	0	
DR	0		SS	0	
SC'	1	1.1	HS	0	36.4
SC	3	3.4	SD	4	27.3
RF	0		SH	3	9.1
UF	0		SP	1	
PS	62	71.3	SW	3	27.3
CR	3	1.1	その他	0	
DM	1				
小計	87	-	小計	2	-

第11表 南区縄文下層5期石器組成表

打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	194	30.1	AX	4	8.5
DR	5	0.8	SS	1	2.1
SC'	8	1.2	HS	3	6.4
SC	26	4.0	SD	12	25.5
RF	0		SH	10	21.3
UF	10	1.6	SP	3	6.4
PS	388	60.2	SW	12	25.5
CR	7	1.1	その他	2	4.3
DM	6	0.9			
小計	644	-	小計	47	-

第12表 南区縄文下層3期石鏃類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
A1			B1			C1			D1			E1		
A2	1	33.3	B2	1	33.3	C2			D2			E2		
A3			B3			C3	1	33.3	D3			E3		
A4			B4			C4			D4			E4		
A5			B5			C5			D5			E5		
A計	1	33.3	B計	1	33.3	C計	1	33.3	D計			E計		

第13表 南区縄文下層3期楔形石器類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%
A1			B1	3	60.0	S1	1	20.0
A2			B2P	1	20.0	S2		
A3			B2L					
A4			B2V					
			B3					
			B4					
			B?					
A計			B計	4	80.0	S計	1	20.0

第14表 南区縄文下層4期石鏃類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
A1	1	5.9	B1	1	5.9	C1	1	5.9	D1			E1		
A2			B2	7	41.2	C2	2	11.8	D2			E2		
A3	1	5.9	B3	1	5.9	C3	1	5.9	D3	1	5.9	E3	1	5.9
A4			B4			C4			D4			E4		
A5			B5			C5			D5			E5		
A計	2	11.8	B計	9	53.0	C計	4	23.6	D計	1	5.9	E計	1	5.9

第15表 南区縄文下層4期楔形石器類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%
A1	1	13.4	B1	17	27.4	S1	1	1.6
A2	9	14.5	B2P	11	17.7	S2	1	1.6
A3	2	3.2	B2L	4	6.5			
A4	7	11.3	B2V	5	8.1			
			B3	3	4.8			
			B4					
			B?	1	1.6			
A計	19	30.6	B計	41	66.1	S計	2	3.2

第4節 石器

第16表 南区縄文下層5期石鏃類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
A1	26	13.4	B1	13	6.7	C1	13	6.7	D1	1	0.5	E1		
A2	28	14.4	B2	26	13.4	C2	27	13.9	D2	3	1.5	E2	1	0.5
A3	11	5.7	B3	10	5.2	C3	10	5.2	D3	1	0.5	E3	1	0.5
A4	2	1.0	B4	1	0.5	C4			D4			E4		
A5	8	4.1	B5	6	3.1	C5	4	2.1	D5			E5	11	5.7
A計	75	38.6	B計	56	28.9	C計	45	23.1	D計	5	2.5	E計	13	6.7

第17表 南区縄文下層5期楔形石器類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%
A1	5	1.3	B1	131	33.8	S1	10	2.6
A2	20	5.2	B2P	78	20.1	S2	8	2.1
A3	10	2.6	B2L	32	8.2			
A4	37	9.5	B2V	34	8.8			
			B3	15	3.9			
			B4	3	0.5			
			B?	6	1.5			
A計	72	18.6	B計	298	76.8	S計	18	4.7

第18表 南区先行トレンチ出土石鏃類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%			
A1	4	8.3	B1	6	12.5	C1	4	8.3	D1	1	2.1	E1		
A2	5	10.4	B2	1	2.1	C2	11	22.9	D2	1	2.1	E2		
A3	1	2.1	B3	3	6.3	C3	2	4.2	D3	2	4.2	E3		
A4			B4			C4			D4			E4		
A5			B5	3	6.3	C5			D5			E5	4	8.3
A計	10	20.8	B計	13	27.2	C計	17	35.4	D計	4	8.4	E計	4	8.3

第19表 南区先行トレンチ出土楔形石器類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%
A1	2	1.3	B1	58	36.7	S1	2	1.3
A2	9	5.7	B2P	29	18.4	S2	3	1.9
A3	3	1.9	B2L	16	10.1			
A4	15	9.5	B2V	16	10.1			
			B3	4	2.5			
			B4					
			B?	1	0.6			
A計	29	18.4	B計	124	78.4	S計	5	3.2

第20表 石鏃原位置遊離遺物類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
A1	5	9.4	B1	1	1.9	C1	2	3.8	D1			E1		
A2	2	3.8	B2	6	11.3	C2	12	22.6	D2			E2		
A3	4	7.5	B3	11	20.8	C3	2	3.8	D3			E3		
A4	2	3.8	B4	1	1.9	C4			D4			E4		
A5	1	1.9	B5	2	3.8	C5			D5			E5	2	3.8
A計	14	26.4	B計	21	39.7	C計	16	30.2	D計			E計	2	3.8

第21表 楔形石器原位置遊離遺物分類表

	点数	%		点数	%		点数	%
A1	1	0.6	B1	56	32.6	S1	7	4.1
A2	4	2.3	B2P	35	20.3	S2	1	0.6
A3	5	2.9	B2L	16	9.3			
A4	20	11.6	B2V	12	9.3			
			B3	11	6.4			
			B4	3	1.7			
			B?	1	0.6			
A計	30	17.4	B計	134	77.9	S計	8	4.7

第22表 北・中央区下層石鏃類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%			
A1	4	25.0	B1			C1	2	12.5	D1			E1		
A2	3	18.8	B2	1	6.3	C2	1	6.3	D2			E2	1	6.3
A3			B3	2	12.5	C3	1	6.3	D3			E3		
A4			B4			C4			D4			E4		
A5	1	6.3	B5			C5			D5			E5		
A計	8	50.1	B計	3	18.8	C計	4	25.1	D計			E計	1	6.3

第23表 北・中央区下層楔形石器類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%
A1			B1	1	9.1	S1	1	9.1
A2	1	9.1	B2P			S2		
A3	2	18.2	B2L	2	18.2			
A4	3	27.3	B2V	1	9.1			
			B3					
			B4					
			B?					
A計	6	54.6	B計	4	36.4	S計	1	9.1

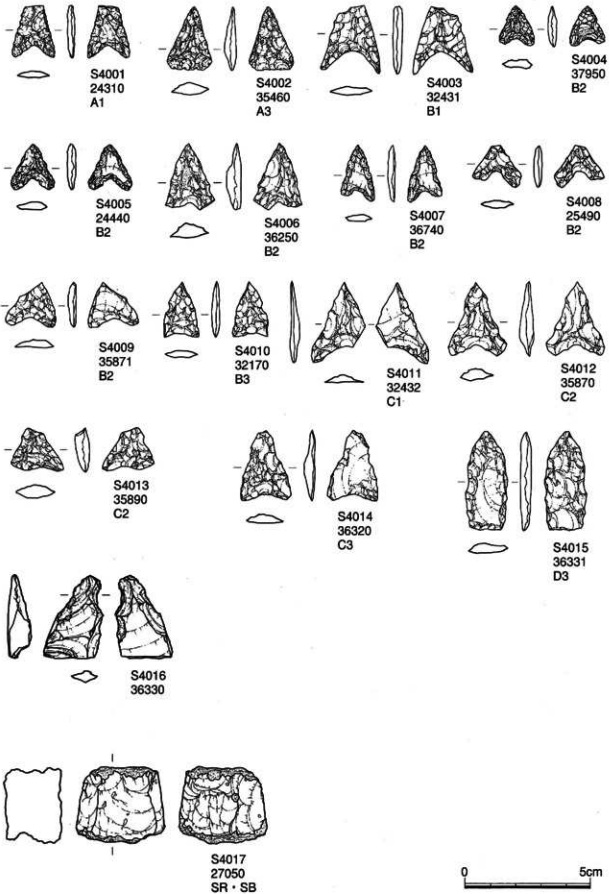
第4節 石器

第24表
南区先行トレンチ出土石器組成表

打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	48	21.0	AX	5	25.0
DR	2	0.9	SS	0	
SC'	2	0.9	HS	1	5.0
SC	8	3.5	SD	3	15.0
RF	0		SH	4	20.0
UF	7	3.1	SP	1	5.0
PS	158	69.0	SW	5	25.0
CR	4	1.7	その他	1	5.0
DM	0				
小計	154	-	小	20	-

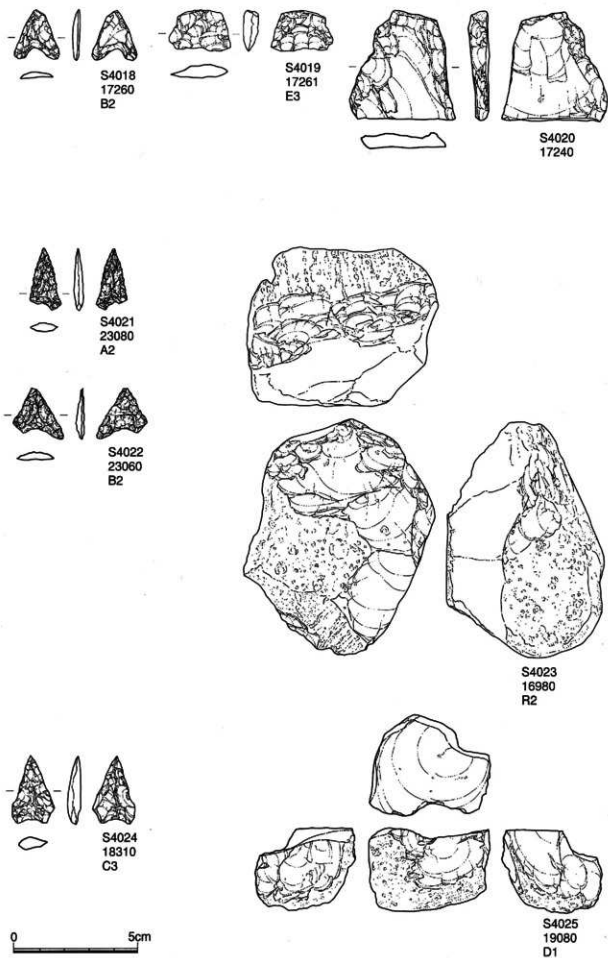
第25表
原位置遊離遺物石器組成表

打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	53	21.1	AX	1	4.5
DR	1	0.4	SS	0	
SC'	1	0.4	HS	0	
SC	6	2.4	SD	5	22.7
RF	0		SH	5	22.7
UF	9	3.6	SP	4	18.2
PS	172	68.5	SW	5	22.7
CR	6	2.4	その他	2	9.1
DM	3	1.2			
小計	251	-	小	20	-

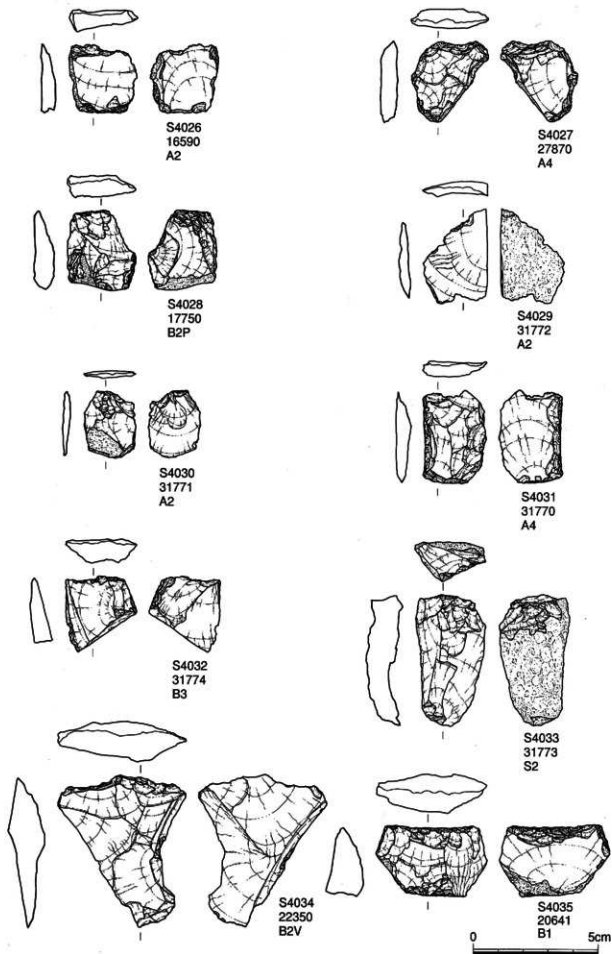


第174図 南区縄文下層（4期）石鏃・石匙・分割原石

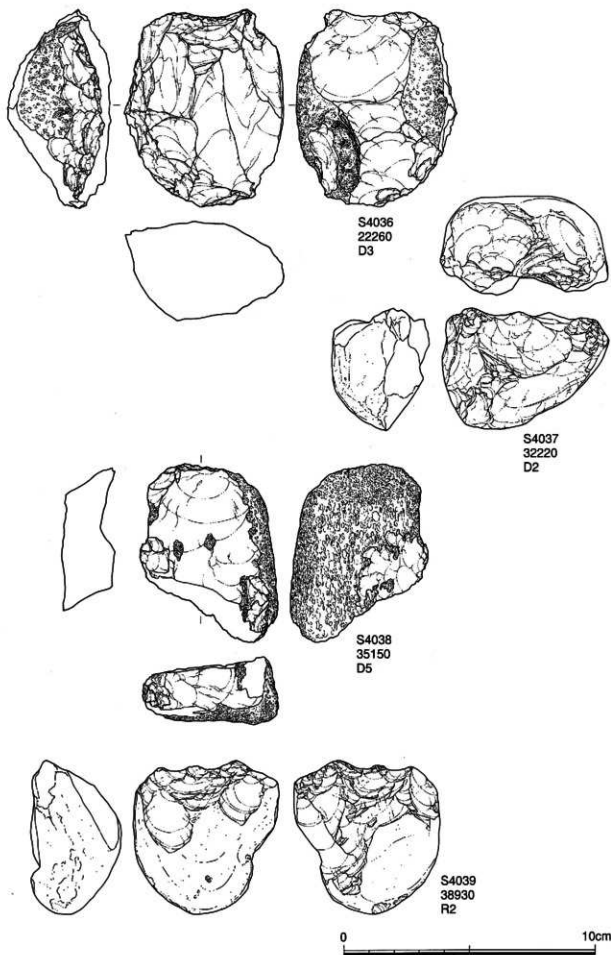
第4節 石器



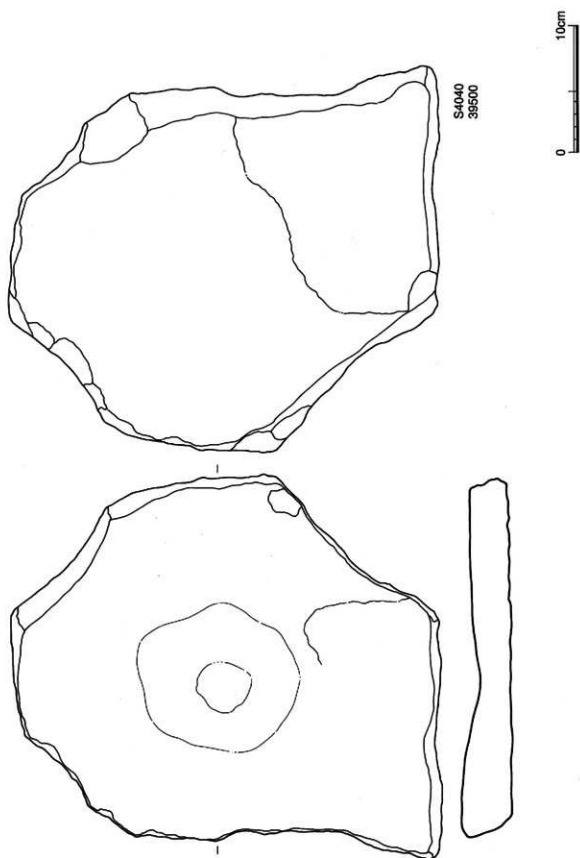
第175図 南区縄文下層(3・4期)石鏃・削器・石核



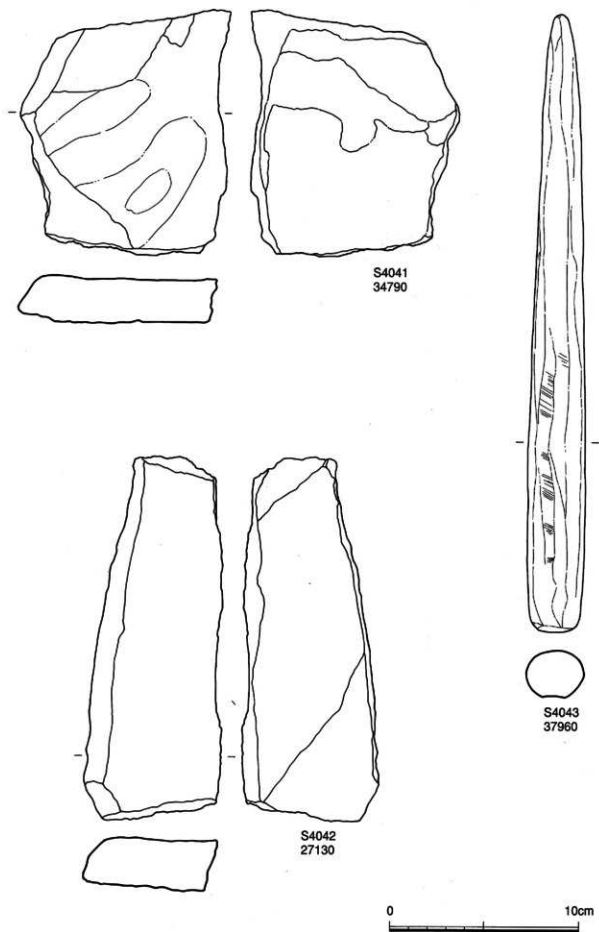
第176図 南区縄文下層(4期) 楔形石器



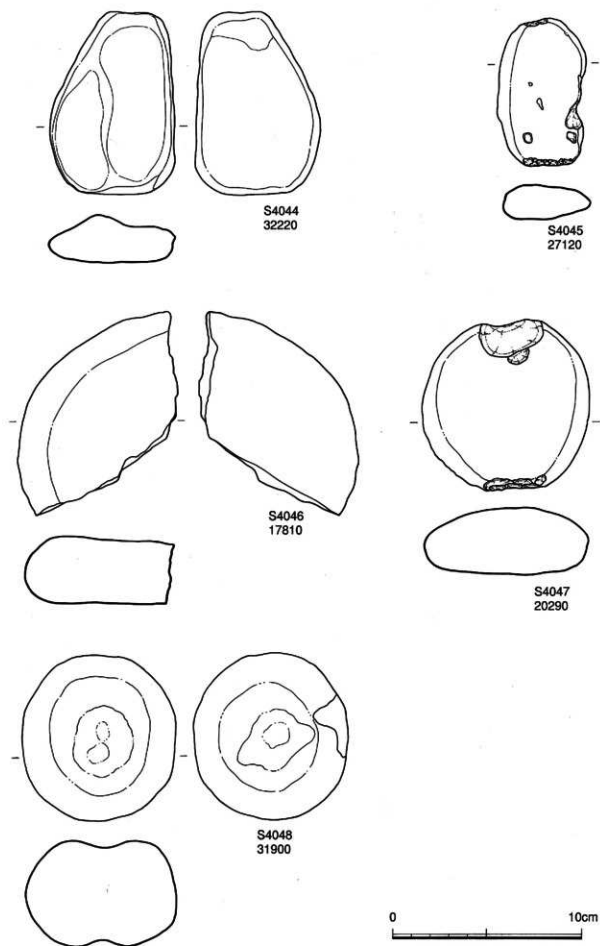
第177图 南区縄文下層(4期)石核



第178図 南区縄文下層(4期)石皿

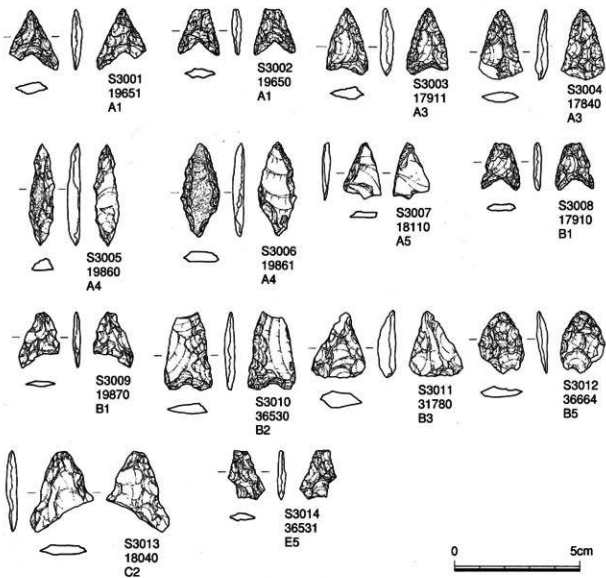


第179図 南区縄文下層(4期)石皿・石剣

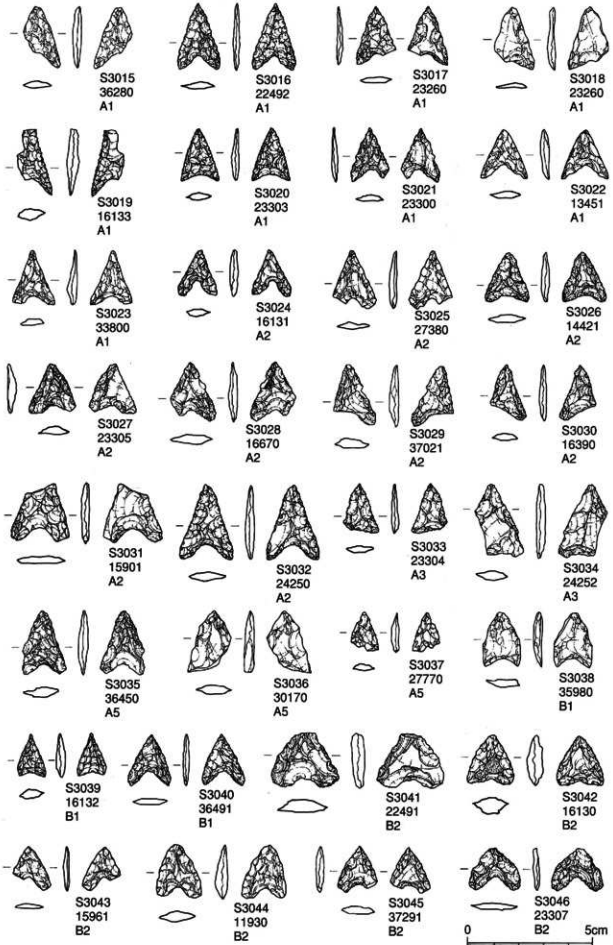


第180図 南区縄文下層(4期)石皿・石鎌・凹石

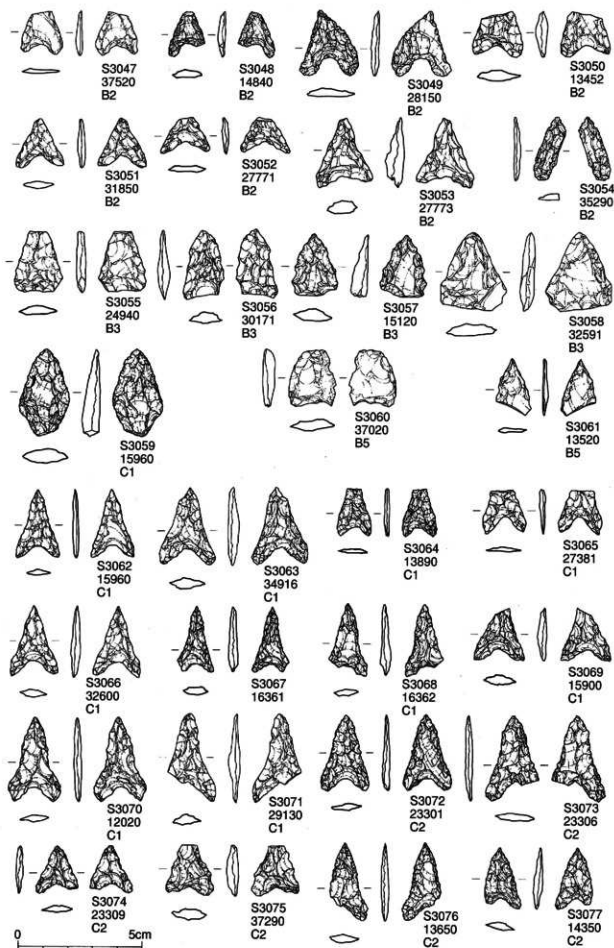
第4節 石器



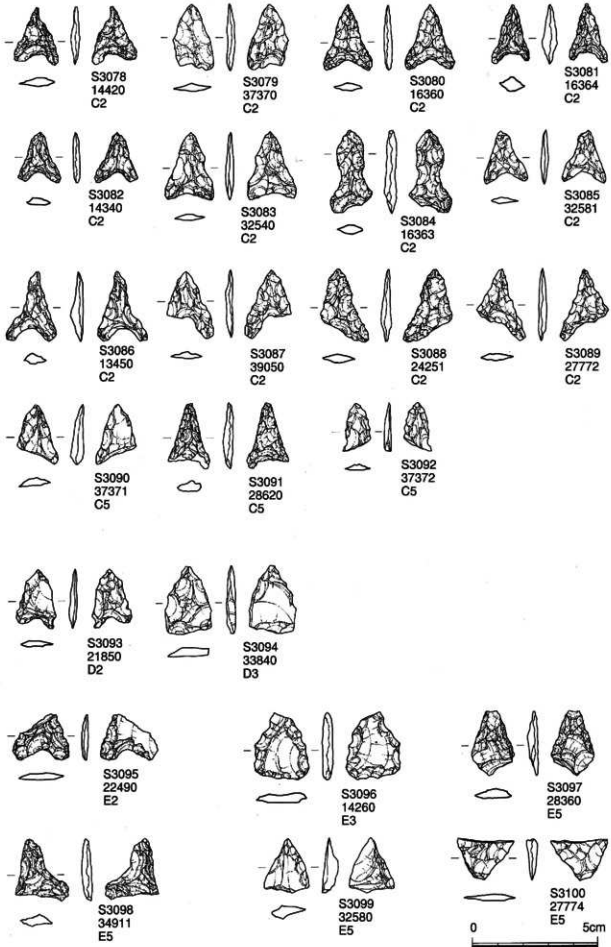
第181图 南区縄文下層(5期)石器-1



第182図 南区縄文下層(5期)石鏃-2

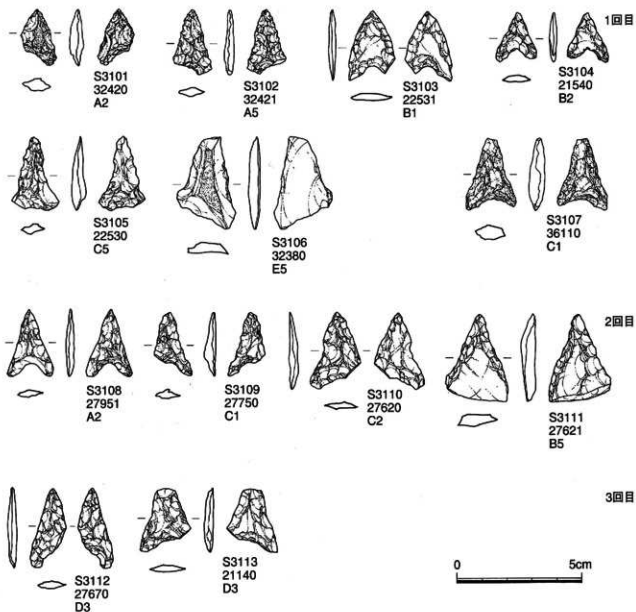


第183図 南区縄文下層(5期)石器-3

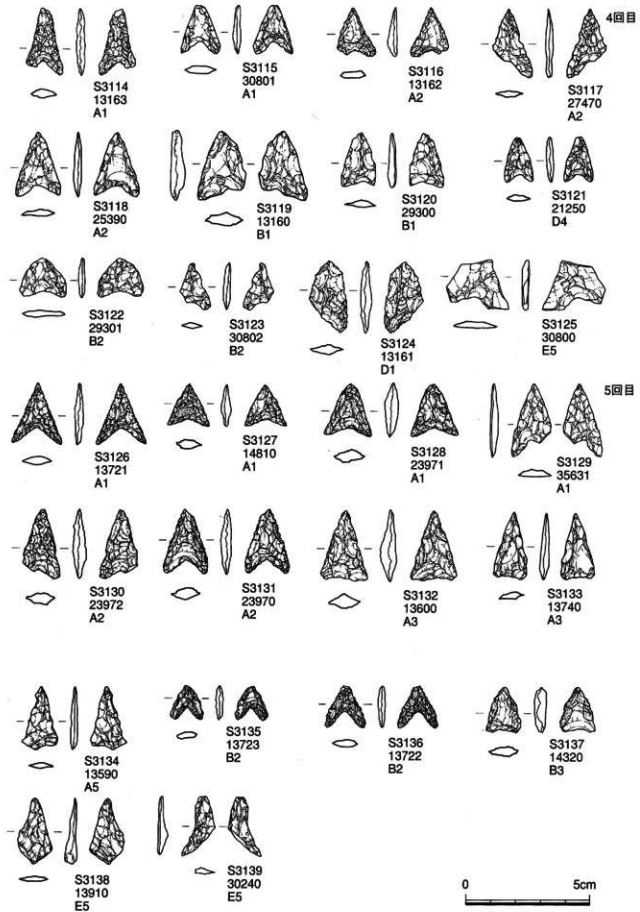


第184図 南区縄文下層(5期)石鏃-4

第4節 石器

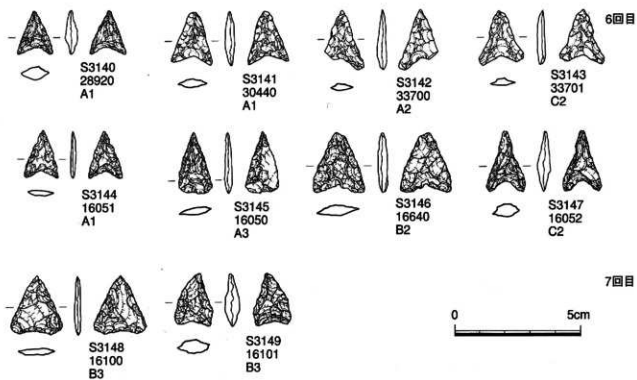


第185図 南区縄文下層(5期)石鏃-5

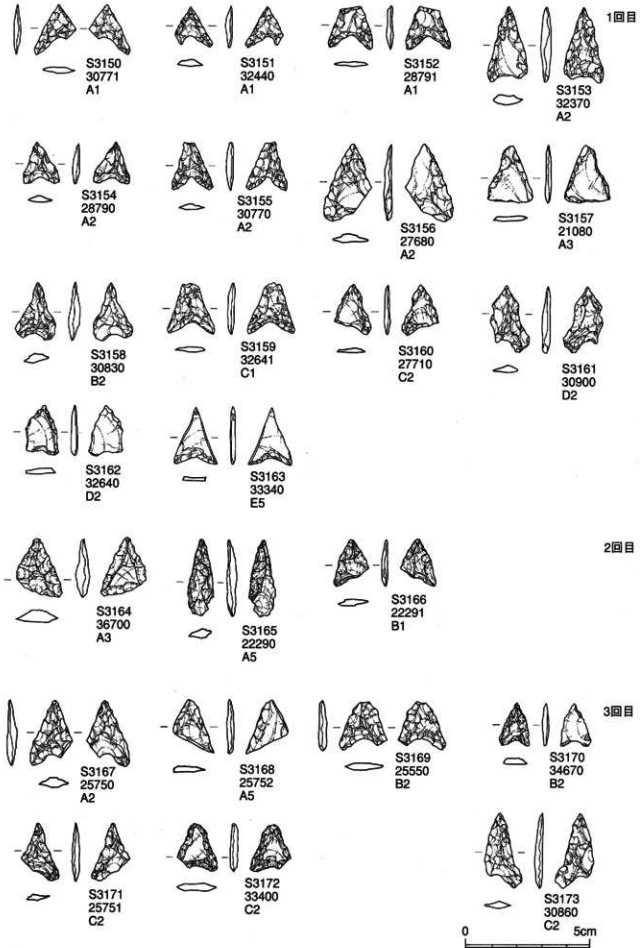


第186図 南区縄文下層(5期)石器-6

第4節 石器

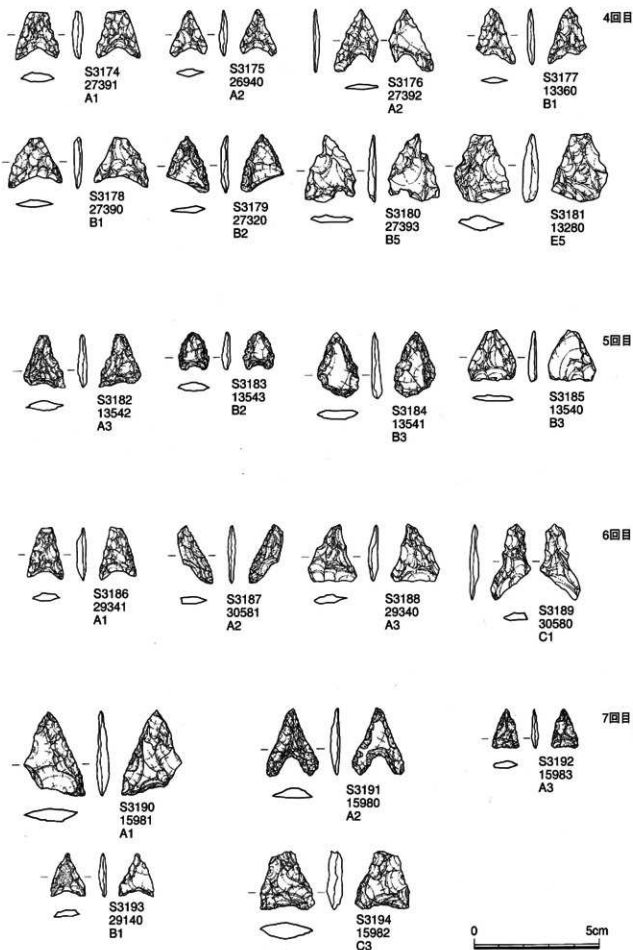


第187図 南区縄文下層(5期)石鏃-7

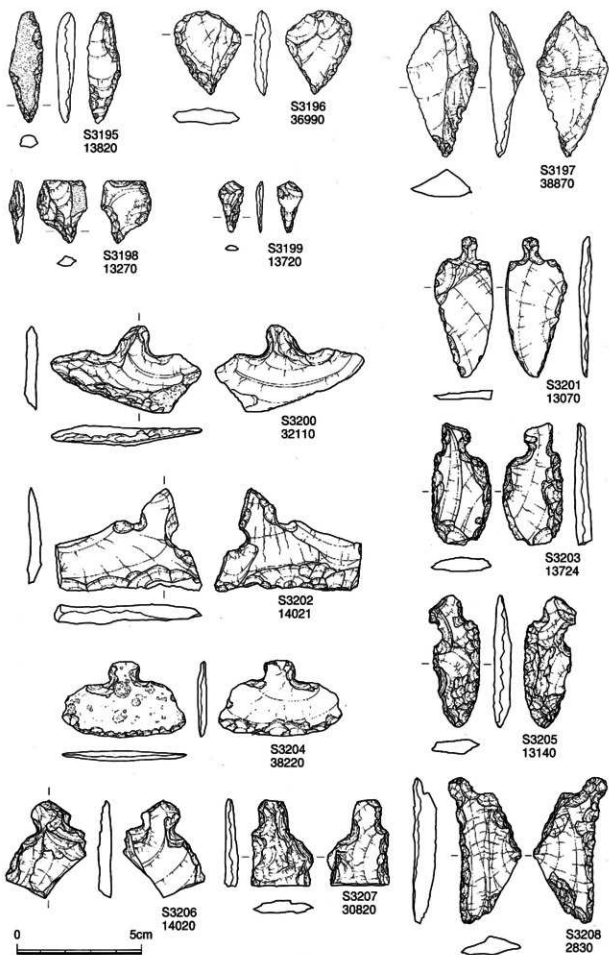


第188図 南区縄文下層(5期)石鏃-8

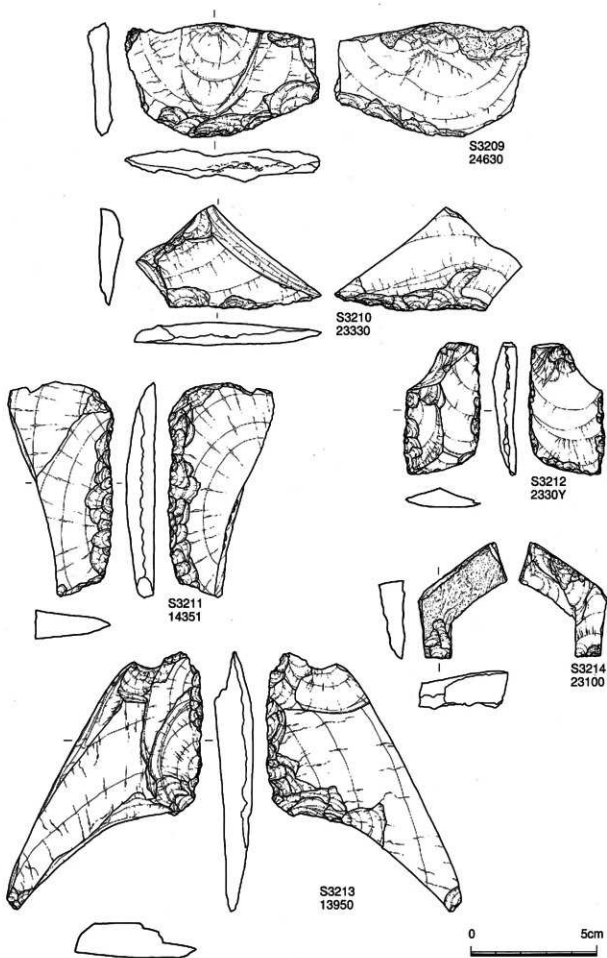
第4節 石器



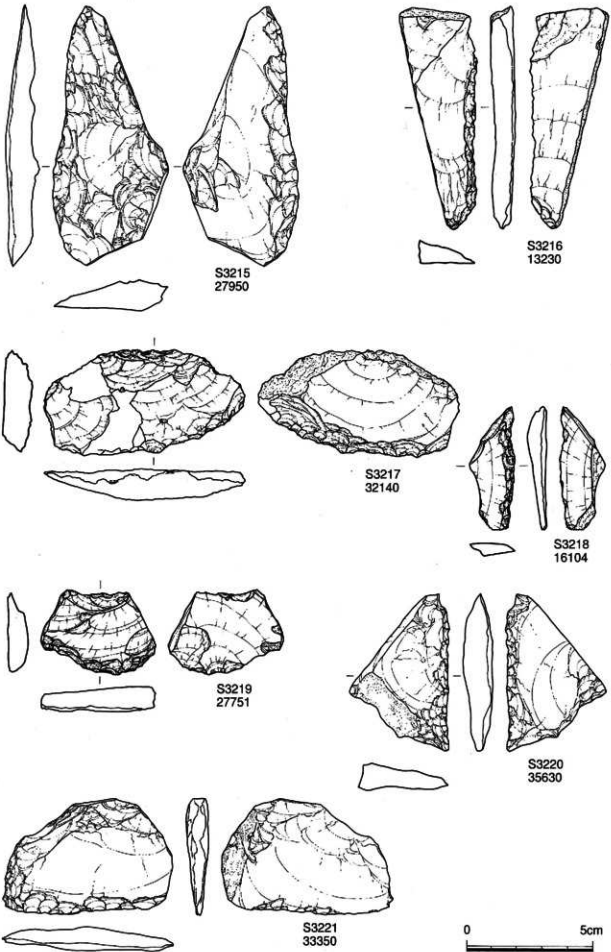
第189回 南区縄文下層(5期)石鏃-9



第190図 南区縄文下層(5期)石錐・石匙

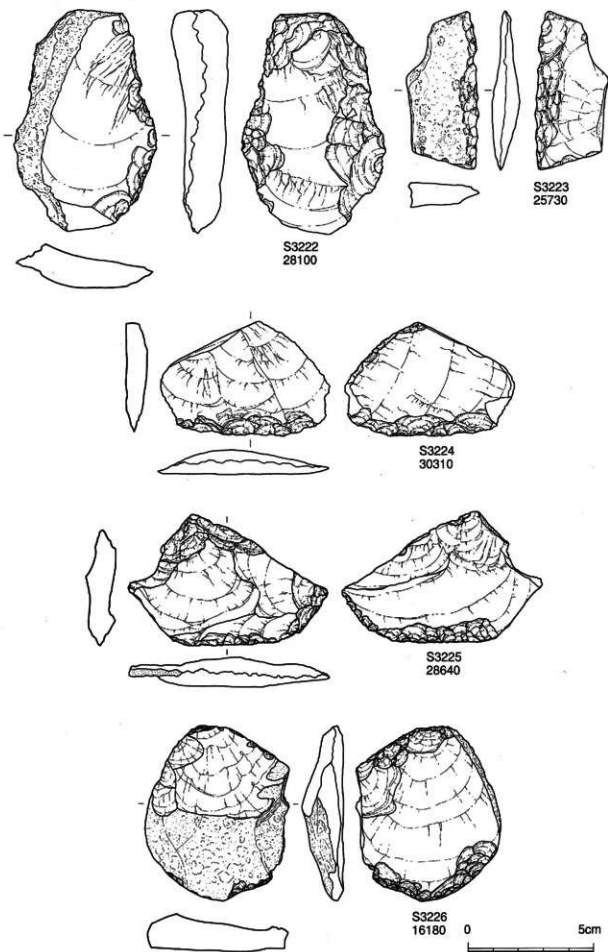


第191図 南区縄文下層(5期)削器-1

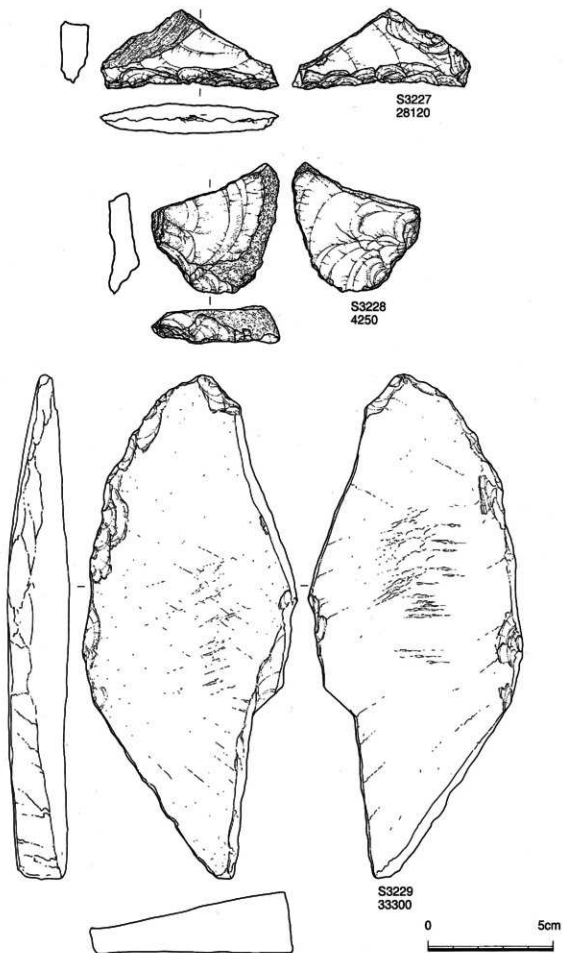


第192図 南区縄文下層(5期) 石器-2

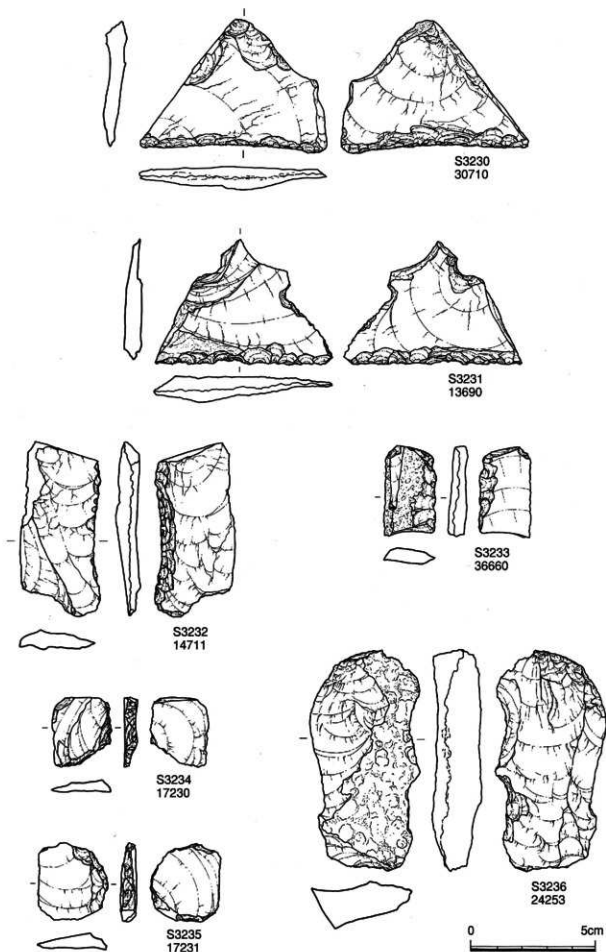
第4節 石器



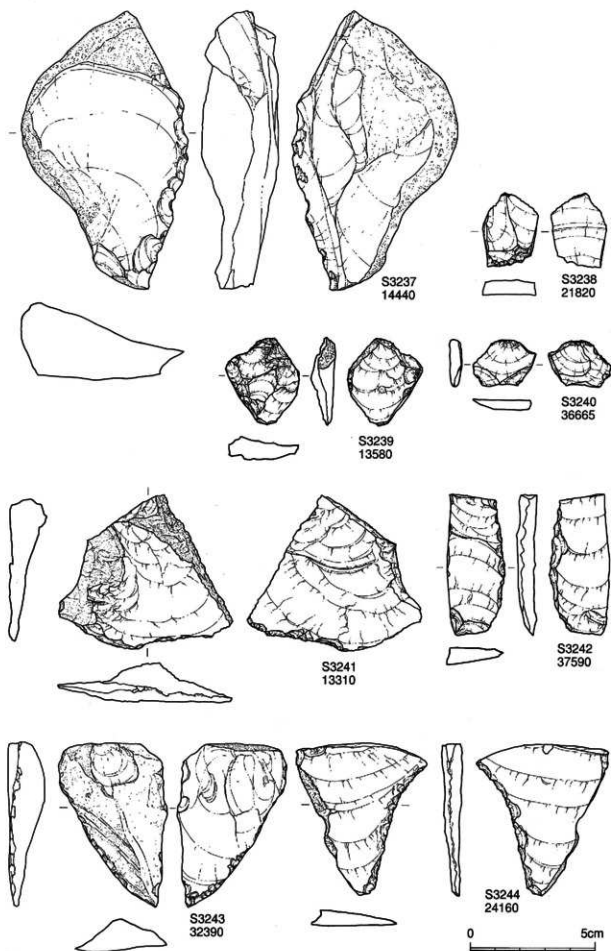
第193図 南区縄文下層(5期)削器-3



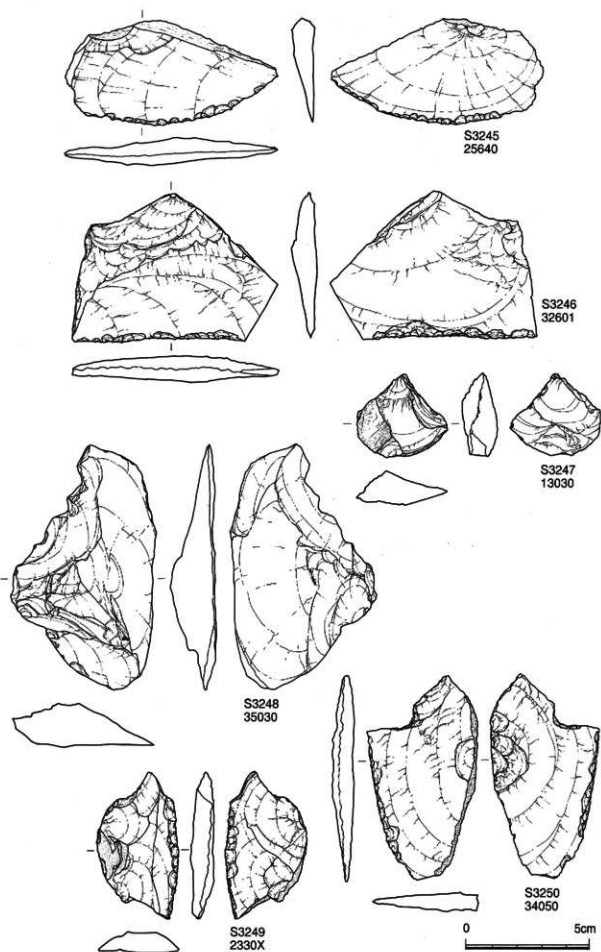
第194図 南区縄文下層(5期)削器-4



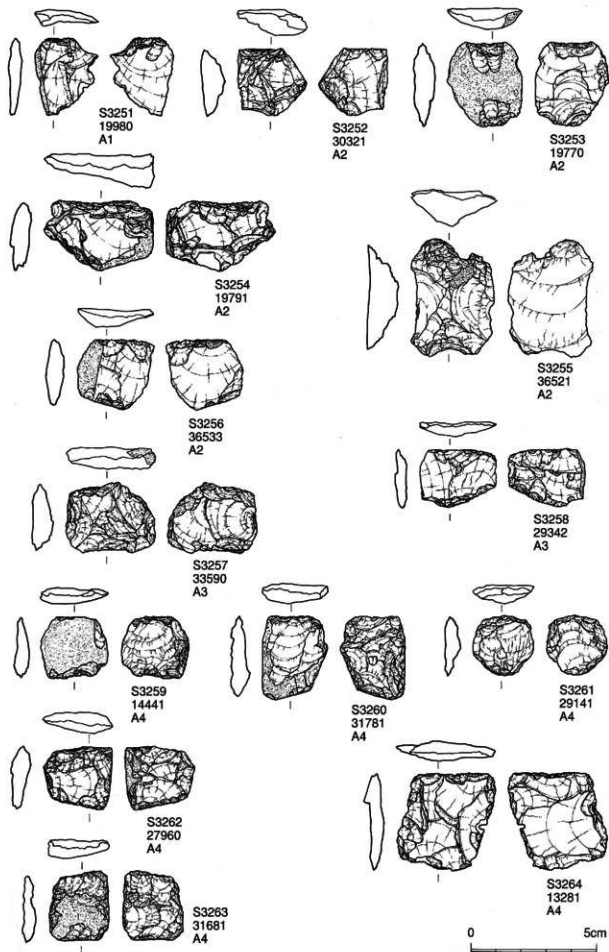
第195图 南区縄文下層(5期) 石器-5



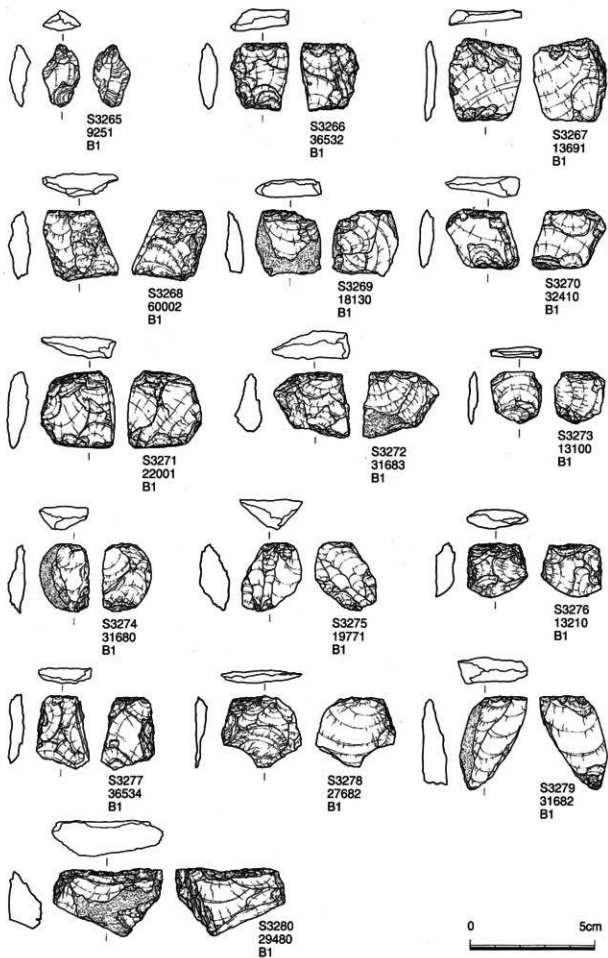
第196図 南区縄文下層(5期)加工痕のある剥片・使用痕のある剥片



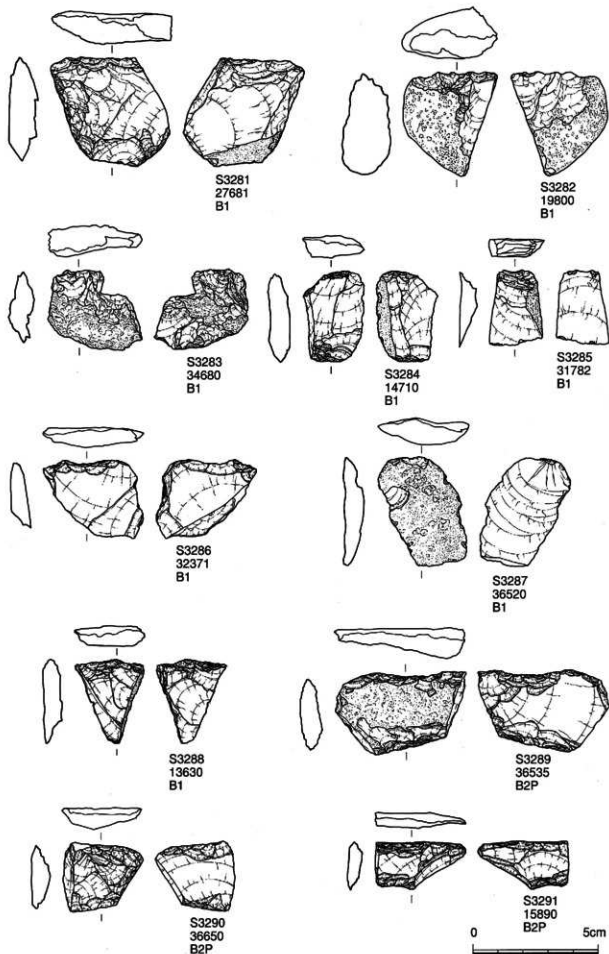
第197図 南区縄文下層(5期)使用痕のある剥片



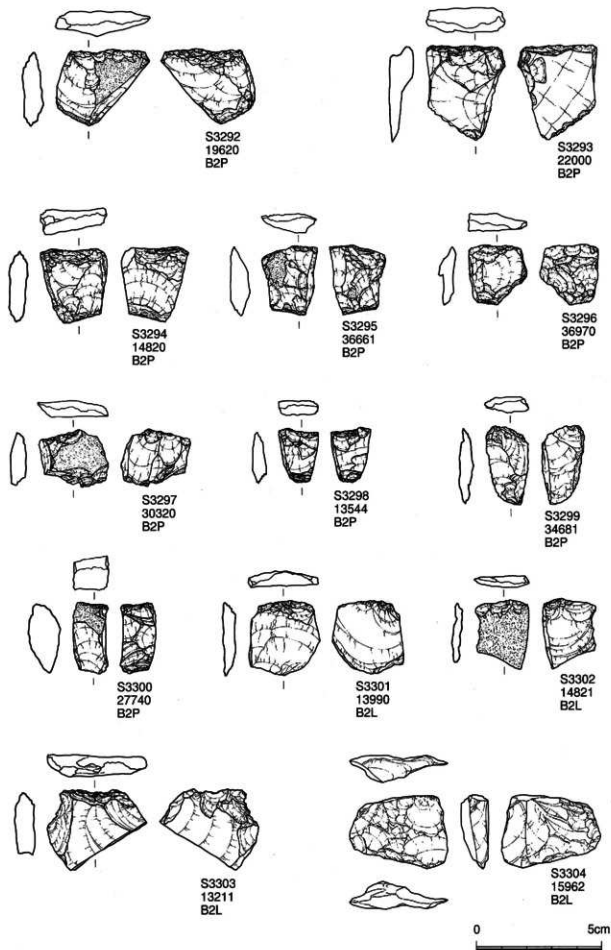
第198図 南区縄文下層（5期）楔形石器-1



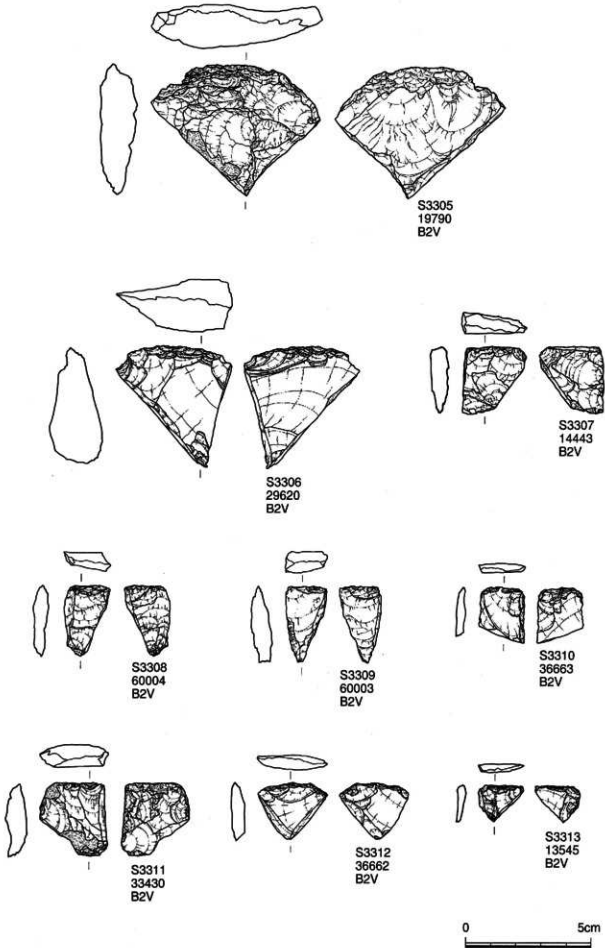
第199図 南区縄文下層(5期) 楔形石器-2



第200図 南区縄文下層（5期）楔形石器-3



第201图 南区縄文下層(5期) 楔形石器-4



第202図 南区縄文下層（5期）楔形石器-5